

烈
祖
成
績

十
三

烈祖成績卷之十三

慶長十九年（一六一一）十月

至 其年（同右）十一月

慶長十九年十月朔、片桐且元、部下兵三百余人を率ゐ大坂を去る。松栄記事作三千余騎。

按ずるに且元、大坂に在り、多兵を許すこと有るべからず。難波戦記作三百余人。為得貫（実）。今從之。大阪記曰、秀頼命七隊長殺東市正。七隊長言曰、宜赦彼罪召之登城。臣等執之甚易。大野修理曰、今拳大事。

宜謀慮周摯不可輕遽。速水甲斐守曰、東市正重臣。大（火）葉多少壕塹深淺、彼悉知之。部兵亦幾一千。彼若通謀關東則凶之甚難。請、臣曉諭之。既而東市正招修理招甲斐守、流涕明其無異凶。請避入高野山。与此

異。拋難波戦記・大阪陣冬夏事記・浪花戦記、七隊長刀（カ）救且光（元）。初無執之之議。故不取 **初め秀**

吉、七隊長を置き秀頼を擁護す。伊東丹後守長次 難波戦記・松栄記事作長實。今拋駿府記

及雜録、丹後守手筆署名・速水甲斐守守久 徳川記・難波戦記作時之。駿府記守次。今從先臣城所友仙

訂正 ・青木民部少輔一重 初称所左衛門見元龜九年。旧事今川義元。義元敗死、仕麾下。有故事秀吉

公。駿府記作一之。難波戦記一治或作正重。今從徳川記・寛永系図 ・**眞野藏人頭宗信** 徳川記・難波

戦記作豊後守頼包。慶元記・浪花戦記・冬夏事記並云、藏人入道守信。抛雑録手書署名、宗信為是。蓋初称
豊後守後更改藏人頭・中島式部少輔氏種・野野村伊豫守吉安 難波戦記作雅春・系図幸成。今
從友仙訂正・堀田図書助正高是なり。徳川記・難波戦記正高作勝喜。今從友仙訂正 是に至り七隊
長、且元を諭し互いに戦争無し。且元の子出雲守孝利 友仙考訂曰、初名元包後更今名 をし
て城中に入れ質と為さしむ。大野治長の子信濃守治徳城外に出で質と為る。事平
し互いに其の質を還して去る。家忠日記・徳川記・慶元記並曰、七隊長送至御厨辺。難波戦記曰、
且元経河内路過鳥養渡。松栄紀事曰、七隊長率五子（千）余兵送且元至渡口。互還其質。一本難波戦記曰、
或云、距大阪城二里。至松原還質。或云、伊東丹後守・堀田図書助送至大和川堤上還質。或云、送至御厨辺
還質。皆非也。在大阪城中還質。為得実。今從之 松栄紀事曰、渡口少舟、且元之兵頗喧擾。此時治長出兵
撃之即必不能免。然畏且元之勇幸共（其）退去不敢追撃。按ずるに、七隊長務めて安輯し戦争無からしめん
と欲す。縦ひ治長兵を出さんと欲すとも七人必ず之を止む。且諸書載せざる所なり。故に取らず。元重、
且元を諫めて曰はく、「阿兄、関東に属さずは則ち宜しく披剃し高野山に入り以て

忠貞の志を著すべし」と。且元曰はく「之を初めに施さば則ち可。計已に晩し。今我披剃せば則ち修理輩必ず相話し（はずかしめる）けが以為へらく、彼、軀命（身命）を惜しむ故に亡げ去ると。今に在りては則ち雑染すべからず」と。遂に茨城古塁に入る。是より大野治長独り兵馬の権を檀ほしいままにす。家忠日記・難波戦記 且元、使を駿府に遣はし告げ茨城に退き入る。神祖大いに怒り大阪を伐つの志有り。駿府記・家忠日記・

徳川記・松栄紀事

是日、秀頼、大野治長・其弟治房・織田有楽・其子長孝・木村重成・渡辺尚・薄田兼相及び七隊長を召し拳兵を決議す。徳川記・慶元記・難波戦記 七隊長皆其言售むく（報）いざるを怨み肯へて出でず。治長饗に託し之を召す。青木一重曰はく「忠勇片桐東市正の如きは疑を蒙り黜せらる。余も亦屢しばしば駿府に使し元正を賀す。頗る大御所と旧有り。故に嫌疑を以て部下共士（兵）を収とらふ。其余の同僚も亦とも与に軍議を聞くを得ず。今之を召し城に入れんと欲す。此れ何ぞ児童を欺くに異ならんや」と。堀田

正高・中島氏種も亦一重の言の如し。速水守久之を和解す。是により七隊長召しに
応ずと雖へども諸將の軍議協せず。難波戦記・浪花戦記板倉勝重急歩を遣はし駿府
に告状す。神祖之を聞きて曰はく「吾秀頼をあわれ矜み教諭すること再四。其のと図を改
むるをねが冀ふ。而れども昏迷悟らず。逆謀ますます滋甚だし。兵を以て之を除かざるを得ず」
と。輒ち江戸に報じ兵馬を督す。大將軍、西州の列侯に下令す。江城の壘壁既に
成る、宜しく各其国に還り士馬を簡練し期を守り以て大阪に会ふべしと。東国の
列侯には高田城完じゆし功竣す、亦宜しく国に還り以て出師の期を待つべしと。家忠日

記・徳川記・難波戦記・松栄紀事。此非一日之事。欲其事实接続。故終言之。下倣之保科正光命を奉うけ
淀城を警備す。家忠日記

二日、秀頼書を諸国に馳せ、庚子の乱の久徒(反)に党し山沢に逃匿する者を招く。眞

田信仍・長曾我部盛親 松栄紀事曰、長曾我部祐夢流寓京師二条街市。板倉勝重慮其有異図毎日遣兵

士巡察旅舎。祐夢憚其為己勞人曰、与浅野但馬守有旧約。願往紀州以立戦功。勝重謂、但馬守未来。祐夢之

情叵（不可）測。乃伏（使）其親友保之。親友奉契券保之。時秀賴密遣使招之。許以封国祐夢倍親友之誓約。乘夜入大阪城。秀賴大悅賜印章使之招募四国之士。祐夢旧部曲來聚可百騎。秀賴使祐夢為一萬之將。按ずるに、盛親剃髮し祐夢と号する、上文五年に見ゆ。然るに諸書皆元名に係く。今之に従ふ。蓋し兵起し髪を養ふなり。・明石守重 旧宇喜多秀家之臣。関原之役從秀家事見五年。松栄紀事曰、守重家甚富。秀家被流後流落。素奉耶蘇宗。遇禁逃匿。今応秀賴之招。・仙石宗也 旧称豊前守。松栄紀事曰、事仙石秀久有罪被錮。・後藤又兵衛年房 松栄紀事曰、旧黒田長政之臣。有罪出奔。被錮匿于南都。大野治長密養之。以女姪妻之。諸書名基次。細川家傳録作元親、南行雜録曰、初名正氏。大阪之役更年芳。今從之。・内藤新十郎政勝 抛武田系図又十郎政貞子、旧武田氏伊豆守元光之子内蔵助某。有故養於内藤氏。国（因）更内藤氏。冬夏事記曰、淀殿侍女宮内卿子。・御宿勘兵衛政友 抛武田系図武田氏之族。監物信友子。始事北條氏政後事越前少將忠直。有故叛入城。称越前守。前車後語集作長則。難波戦記正倫。蓋与政友同音。今從武田系図。浪花戦記曰、勘兵衛秀頼馬芸師也。・山口左馬助弘定 難波戦記曰、大聖寺城主玄蕃頭第二子。・小倉作左衛門行春 徳川記。難波戦記並作行陰。今從松栄紀事。旧事蒲生氏郷領一萬石。

大場土佐守・平子主膳・塙檀右衛門直次 旧事加藤嘉明筑紫軍記作直之。今從慶元記○浪花戦記

塙作埴是也。国音転写並誤。作塙然伝襲既久。今世亦有塙氏故不輒改。岡部大学則綱 冬夏事記曰、

大学初称大塚大学。与塙團右衛門事加藤嘉明・山川帯刀賢信 旧事浅野幸長。徳川記作景綱。今從難

波記・難波戦記・長岡與五郎興秋 細川忠興第二子。忠興有故絶之 北川二郎兵衛宣勝等客兵

知名の士相踵来集す。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 板倉勝重、関を淀葛葉に置き

客兵の大阪に入る者を按驗す（調べる）。猶ほ逸去を慮り市人をして各保伍を為さし

め客兵を出だすを禁ず。初め豊臣秀吉金錘を作り 俗称千枚（枚）分銅 城中に蔵す。大

野治長之を毀ち急ぎ之を鎔範す（とかし鑄る）。小川七郎右衛門をして其事を監しむ。

名づけて竹流と曰ふ。諸士に頒ち給ふ。大阪記・松栄紀事 故に諸国の客兵飢渴を免か

れん為に名氏を詐冒し誰某と称し以て招募に応ず。号すること六万余騎。松栄紀事

作五万騎。大阪記七万三千五百人。今從難波戦記○創業記曰僑人有質者徴之。無質者不徴 大野治長建議

す。列侯の大阪に属するに応ずる者、皆秀頼の印章を齊へ之を招くも、竟に至る

者無し。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 大阪記曰、秀頼遣巖瀬長兵衛於會津、誘松平下野守。遣

兩森三右衛門於廣島、誘福島左衛門大夫。皆不応 大野治房、船場街を以て要害と為し寨を築き以て東軍を拒がんと欲す。青木一重・伊東長次、之を難じて曰はく、「嘗て老兵の言を聞くに城守は内広きを忌む。敵を禦ぐは必ず難し。況んや天下の兵に対するをや。歲月を遷延し市人を招集す。糧食を耗費するは甚だ無謂なり。兵を選び簡約にするに如かず」と。治房聴かず。寨を船場に築く。農商を駆り入城せしむ。

士人と雑守す。一本難波戦記

三日、神祖、引^ひ両^{りょう}の幕^{まくら}及び白旗を尾張宰相義直に賜ふ。帰藩発兵す。冬夏事記係四日。

今従年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事 中黒幕及び白旗を遠江宰相頼宣に賜ふ。率兵従駕す。創業記・松栄紀事・浪花戦記曰、所賜両宰相之旗、新田氏以来所伝徳川家也。大御所為前將軍准致仕。

故不用旗、唯用認旗。冬夏事記曰、所賜両卿旗幕其数皆同。至于後世官位班資両家相对。使無優劣。但義直卿歸藩出師。故至僕圍皆擐甲。頼宣卿在駿府故従駕。故不戎服

是日、加納城主松平摂津守忠政卒す。年三十五。子忠隆嗣ぐ。駿府記・家忠日記。按ず

るに、忠隆元和七年、台廟諱字を賜ふ。従五位下に叙せられ飛騨守に任ぜらる。然るに幼名考する所無し。

故に其名を書く。秀頼、大野治長に命じ糧食を儲峙ちよじ(たくわえる)せしむ。治長、大坂・界

津・尼崎渡口に泊する所の商船を点ず。多く金銀を出だし其米を買ふ。数日間に

二十万斛こくを得。難波戦記 関東の貢米二万斛 創業記曰、二万斛。松栄紀事曰五万斛。家忠日記不

書量数。今従徳川記・慶元記・冬夏事記 大阪港口に在り。治長兵を遣はし之を戍る。船発

するを得ず。板倉勝重之を聞き、書を織田有楽及び治長に遣はして曰はく「諸君

城守すと聞く。糧食之を闕かくを想ふ。幸い漕運(租)の粗税有り。宜しく之を取り以て

兵食に資すべし」と。治長之を覽、即日船を放ち去らしむ。時の人勝重の智算を

称む。創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・冬夏事記・松栄紀事 是に先んじ、福島正則、米八

万石を運び大阪に在り。大野治長、書を正則に遣はし之を借る。正則之を許す。

故に神祖、其異志有るを疑ふ。創業記・浪花戦記 初め大虞院、秀頼昏愚にして蒞政りせい(政

治にたずさわる）能はざるを知り、織田常眞を以て大将と為さんと欲す。而るに常眞脱去す。外は平常と異ならずと雖へども内実は畏縮す。治長等以為へらく、福島正則・黒田長政・加藤嘉明皆太閤の厚遇する所、羽翼を為すべしと。而れども三人皆江府に在り。竟に來歸せず。其余の諸侯一人として命に応ずる者無し。故に皆憂懼すれども勢中輟す（途中でやめる）べからず。乃ち勗衆声言を為す。駿府・江府出師來攻せば則ち我後を断つ計有り。諸大家の内に歸順を懷ふ寺、間に乗じ來集せば、則ち百万の衆と雖へども何ぞ懼ること之れ有らんと。是に於て兵を分け四面に寨を築き固守す。中島は要害の地、防禦に利あり。故に北は関を天満・中島に設け以て西国の兵に備ふ。南は天王寺・今宮に至るまで壕を鑿つこと三里ばかり。石壁を築くこと高さ一丈。壁上に木刺を列し以て我兵をして登り得ざらしむ。濠底に材木を交加こまこまへて涉り得わたざらしむ。東は大和川・木津川二水を以て險と為し、志貴野・今福より鷺島に至るまで河水を田に激し馬を馳せ得ざらしむ。

鷺島広さ二・三町水深二丈ばかり。船に非ずは渡るを得ず。西は穢多城・傳法院に至るまで戍兵を列す。街市は城に至るまで深隍を穿つこと二町ばかり。人馬超越するを得ず。唯だ南一面は空堀。城兵をして馳騁てい（はせる）に便ならしむ。眞田信仍、寨を天王寺東南に築く。方百歩。眞田二城と号す。大阪記曰、城南平野口門前、姨瀬

村西稻荷山東最為要害之地。後藤又兵衛引繩画地。以築寨。眞田左衛門佐請曰、臣兄伊豆守為大御所之近臣。

想、公上亦有疑臣之心。願得此寨拒守。及戰則闔大城之門以積衆人之疑。且固内之謀也。秀頼許之。又兵衛不悅。秀頼以又兵衛指揮城中諸軍事。又兵衛悅。使左衛門佐守寨。是為眞田出丸。東軍來攻せば則ち西

門より出で之を横撃し、兵を引かば則ち東門より入る。伊木遠雄、之を監る。伊丹周防守・平井七郎兵衛・山川賢信・北川宜勝等五千人、信仍の部兵一百五十人武城を守る。其余城中多く箭眼・銃眼を設く。十歩に一櫓を構ふ。兵を置き之を成る。守禦備へ至らざる無し。城中相誇りて曰はく、「尺險（天）加ふるに人力を以てす。兵多く食足る。古来より堅城此の如き者有らんや」と。松榮紀事 大阪記曰、大阪城広袤

(こつぼう「東西南北の広さ」二里八町。難波戦記曰、城西深池隔岸則西海人馬不通、北帶大河。唯南速(連)陸而地勢漸高。石壁險峻五層殿守上凌雲霄。東南隔玉造口。築眞田出丸。西南道頓堀下流。穢多村鑿池構樓櫓。備銃天(矢)以防西国兵船。其北博勞淵前有二川。西則葦島、南北有池。最為要害之地。西北福島新家。大野治長備戰艦繫大安宅丸。使宮島備中守・樋口丹後守監之。以拒舟路之兵。福島寨雉堞五十步亦構樓櫓。小倉作左衛門・大野道見守之。東北京橋之北築堤列柵置戍兵以備志貴野・今福之敵。守禦之方無復所遺。按ずるに、此れ松栄紀事と叙事同じからずと雖へども地形異なること無し。附し以て致に備ふ 眞田信仍建議して曰はく「臣料るに、関東北国の兵其半は未だ京師に至らず。兵を見るに多からず。孤城を座守するは計の得る者に非ず。宜しく山崎に出兵し親みずから三軍を撫もち天王寺に建旗すべし。毛利豊前守と臣とを以て先鋒と為す。長曾我部宮内少輔・後藤又兵衛、大和路を攻め宇治橋に拠り伏見城を陥す。火を京師に縦たば則ち畿内海西道路擁塞の天下の兵必ず来歸せん。此れ勝を制するの術なり」と。後藤年房曰はく「策誠に善し。然れども此の城は無双の名城なり。天下の兵を挙げ之を

攻むとも三、五年間必ず抜く能はず。情に勢屈すと見ゆ。太閤恩遇の士必ず通謀者有り。城守便たり」と。秀頼之に従ふ。一本難波戦記・浪花記並曰、大野修理素欲城守。後

藤又兵衛欲出戦。略与眞田左衛門佐之謀相似。十幡勘兵衛為間在城。沮其計。故修理決意城守。与此異。今

従大阪記 大坂掌書記和久半左衛門是成、家忠日記云、後更是安 松平政宗素厚き所なり。

故に秀頼是成を以て使と為し政宗を誘ふ。政宗兵を率ゐ江戸に赴き是成と小山に遇ふ。是成將に命ぜんまなとす。政宗怒りて曰はく「我何故秀頼に党せん、儻し他人を以て使と為さば則ち立ちどころに之を誅す。汝は旧知なり。故に汝を活かす」と。輒ち之を却け人を三島に遣はし要めて之を捕へもと以て江府に送る。大將軍、三

島代官井出藤左衛門・佐野平兵衛をして之を幽せしむ。家忠日記・徳川記・慶元記・難波

戦記・松栄紀事。諸書皆云、乱平賜是成於政宗。駿府記係十一月三日曰、大將軍至三島。政宗以山岡志摩為

使告捕半左衛門

四日、松平政宗江戸に至る。秀頼、河北莊左衛門を以て使と為し、印章を齊へ正

宗短刀を島津家久に贈り以て之を誘ふ。家久之を却けて曰はく「関原の役、兵庫頭、秀頼の命を奉^うけ戦陣に竭力す。大いに関東の旨に忤^{もと}る。闔^こ族（一族すべて）誅夷に当る。而るに罪戾^{ざいれい}を厚宥し封疆安堵せらる。莫大の恩未だ嘗て一日たりとも之を忘れず。吾秀頼の命に応ずる能はず」と。乃ち其使を逐ひ、使を駿府に遣はし上状す。戦期を奉^うけ以て大阪に会するを請ふ。駿府記・難波戦記・松栄紀事 大將軍、土井利勝を以て使と為し神祖に白して曰はく「大阪の反計既に具ふ。今將に之を討たんとす。願はくは、大人先^{たいじん}づ関東の庶務を処分せよ。然る後に兵を發せん」と。神祖報^{かえ}して曰はく「吾先づ京師に往き其实を探問せん。秀頼及ばずは則ち速やかに駕を回し、反せば則ち將軍亟やかに之を討て。今「吾」既に駕を命ず。將軍も亦宜^{あつ}しく大兵を師^{あつ}め相繼して發つべし」と。利勝命を奉^うけて還る。松栄紀事

八日、竹中重信、江城の墨壁を修築す。功竣し駿府に來謁す。神祖、其の福島正則の旧友たるを以て之をして又江府に抵^{いた}らしむ。正則を諭して曰はく「大阪の拳

兵は必ず秀頼の謀に非ず。有楽・修理・長門輩、年少の兇徒と朋比し秀頼を欺罔し邪謀を構へ成す。瞭然として見るべし。子し、太閤の恩眷を被る。豈に復び秀頼を疏斥するや。今茲こんじ（今年）の挙、知らず、子し之を何と謂ふ。秀頼、吾父子に倍そむかず。従ひて知るべし。然れども嫌疑の際は人の処し難き所。子、兵衆を以て息備後守そくに付くるに如かず。江府に留守し以て衆人の疑を釈とけ」と。重信命を衛（衛）み去る。

駿府記・松栄紀事 板倉勝重日に大阪の密謀を報す。松平定勝伏見城に在り。松平信吉・

井伊直孝 直孝時以大曆頭在伏見城。渡辺山城守と議り謀を大阪に遣はし、城中の動息

悉く之を知る。輒ち駿府・江府に報す。大阪計に及ぶこと既に著し。故に神祖、

大將軍をして出師せしめ之を討つ。家忠日記・松栄紀事 本多正純・板倉重昌を召し下

令して曰はく、「大和諸將須らく本州に在り以て号令を待つべし。伊勢・近江・美

濃・尾張・参河・遠江の兵須らく星夜馳せ上り淀・勢多に屯すべし。北国の兵、

大津・阪本・堅田に屯し、四国の兵西宮・兵庫に屯し、中国の兵池田に屯し、西

国の兵泉州沿海に泊すべし」と。冬夏事記 向井将監忠勝命を被り大船を尼崎に造る。艦一百挺を設け部下の士一百八十人を留め之を董すただ（監督する）。江府に来告状す。神祖、松平定行を以て前鋒に属し伏見に抵いたらしむ。父定勝と合兵し以て伏見・淀二城を守る。松栄紀事 松平信吉、小出吉英を副とし泉州岸和田城を守る。鷲峯文集・藤井松平紀功碑・松栄紀事 井伊直勝罹疾す。故に其弟直孝をして佐和山の兵を将ゐ以て戦期に会せしむ。本多忠政、伊勢路の主将と為り桑名を発つ。松栄紀事 浪花戦記曰、是日召関西代官長五味藤九郎命三事。其一修繕道路桥梁、其二点定諸軍郵舎、其三聽市人百姓之訴。又召関東代官長彦坂平九郎、運輸諸軍糧食、使無之絶。平九郎監関東八十万石之租税。時人此（比）之蕭何（漢の高祖功臣）。按ずるに、此時彦坂氏、平九郎と称する者無し。蓋し九兵衛光正なり。皆諸書載せざる所。附し以て攷に備ふ

十日、宇都宮城主奥平大膳大夫家昌卒す。年三十八。子大膳亮忠昌嗣ぐ。家忠日記・

寛永系図

十一日、神祖、麾下の兵五百余騎を率ゐ駿府を發す。本多正純軍事を指揮す。年譜・

創業記・家忠日記・徳川記・難波戦記・松栄紀事 駿府記曰、或云、四百七十騎 莊田三太夫 難波戦記

作小左衛門。蓋更称也。・穂阪金右衛門、旗奉行を為す。大久保忠教・若林和泉守、槍

奉行を為す。坪内總兵衛・渡邊彌之助・嶋田清左衛門・山岡景以・蜂屋七兵衛・

布施孫兵衛・三宅源右衛門・間宮左衛門・近藤秀用等弓銃隊長を為す。難波戦記・冬

夏事記 遠江宰相頼宣、数百騎を將しんがりゐ殿を為す。其傳ふ安藤直次・水野重仲、之に従

ふ。水戸少将頼松栄紀事曰、是時猶称鶴千代麻呂 駿府に留守す。中山備前守信吉之

保護す。三宅越後守康信總右衛門康貞子 及其子大膳亮安盛番直す。松栄紀事

是日、神祖田中に至る。天竜川浮梁成る。監吏彦坂光正、台駕未だ渡らず行人を

禁ずべしと白す。神祖曰はく、「凡そ舟梁は行人をして過ぎ易からしめんが為なり。

豈に之を禁ずべき。但だ多衆競ひ渡らば則ちまさ心まさに速壊すべし。宜しく一騎にて過

ぎ、並行するを得ざるべし」と。駿府記・松栄紀事

十二日、懸川に至る。大野治氏大阪より還り言ひて曰はく、「戎を興し怨を構ふる、皆織田有楽と家兄修理との為す所なり」と。神祖之を聞き其城中に留せざるを称む。家忠日記・徳川記・難波戦記・慶元記並曰、吉岐守不能入城至茨城逢片桐且元。諭旨而帰。創業記曰、

神祖甚怒。使吉岐守不得入城。今從駿府記・松栄紀事 是に先んじ板倉勝重、関を淀・伏見に設け僑人（浪人）を按驗す。木村總右衛門・河村与三右衛門をして淀関を成らしむ。僑

人柏原源左衛門多衆を率ゐ、中夜、関を斬り將に大阪城に入らんとす。總右衛門・与三右衛門追撃し八幡堤に戦ふ。源左衛門を斬り級を送る。勝重、之を吉田駅に上

る。たてまつ松栄紀事 大坂中島寨既に成る。織田雲生寺 左門長頼薙髮号雲生寺 数百騎を率ゐ戦

場を按行し、尼崎側近を過ぐ。片桐且元二百余人を遣はし尼崎を援く。たまたま適雲生寺

と遇ひ中路に戦ふ。衆寡敵せず。且元の兵戦死するもの三十余人。遂に潰走す。

是より茨城左右土寇多く起つ。且元、援を板倉勝重に乞ふ。勝重、丹波の兵を督し援に赴かしむ。村上三右衛門吉正、丹波一邑を領す。土人其の恵みを懐ふ。吉

正民兵を率ゐ光(先)に到る。難波戦記・松栄紀事 秀頼、兵を遣はし界津を侵さんと欲す。

市人、硝石一千斤を輸いたし秀頼の印章を請ふ。片桐且元兵を遣はし其故を詰問す。創

業記 浪花戦記曰、市人聞寇至、悉欲離散。阿加屋生順数百年來相承。其家富豪。巡市諭曰、老弱不可妄動。

須使老人献硝石一千斤於大阪以請禁剽掠。丁壮二百人須護送政所芝山小兵衛於岸和田。大阪詰之則委罪丁壮、

政所詰之則委罪老人。如此則必免過矣。果如其詐。按ずるに、硝石を輸(いた)す、諸書載せざる所にして

創業記と合ふ。今是に従ふ。秀頼、赤坐内膳正・榎島玄蕃頭昭光 細川家傳録曰、後剃髮号云菴 在

して三百余騎を率ゐ界津を侵さしむ。政所芝山小兵衛定好、眼を患ふ。且、兵寡すくなく

拒ぐ能はず。定好患眼抛浪花戦記 富商今井宗薫、素関東もとに属す。大阪の兵、其の貨財

を奪はんと欲す。宗薫救を片桐且元に求むるも援軍未だ至らず。大阪の兵、宗薫

及び其子宗吞を禽へ城中に送り貨財を籍没す。定好岸和田に奔る。家忠日記・徳川記・

慶元記・難波戦記・松栄紀事 家忠日記曰、定好奔阿波。松栄紀事曰、奔南都法隆寺。冬夏事記曰、奔高野

山。蓋乱平後懼罪入高野山也。今從創業記・浪花戦記・雜録・今井彦右衛門家伝 尼崎は西海の要津な

り。戌将建部三十郎政長、年尚ほ少^{わか}し。政長後称内匠更任丹波守 神祖、其姻戚松平利

隆をして之を援けしむ。利隆、其宰池田越前・南部越後を遣はし同守せしむ。家忠

日記・松栄紀事、無越後而作越前一人。冬夏事記亦無越後而作池田越前・田宮对馬二人。今従徳川記・難波

戦記・浪花戦記。又按ずるに、上文五月、池田越前守重利始めて神祖に謁す。豈に即ち此人ならんや。未詳

十三日、神祖中泉に至る。中路に日日放鷹す。従駕の歩騎皆大路を過ぐ。長谷川

藤廣上言す。去る九月二十四日、高山南坊・内藤如安等邪徒一百余輩を阿媽港に

放つと。徳川記・難波戦記曰、間宮権左衛門還自長崎白之。今従駿府記 福島正則、使者を馳せ

竹中重信に伝旨を謝して曰はく、「臣、秀頼母子逆謀に陥るを憂ふるに勝へず。書

を以て之を諫む。大約に以為へらく、今大仏を経営するに因り関東の旨に忤^{もと}る、

是れ速亡を招くなり。請ふ、亟やかに図^とを改めよ。淀殿を以て関東に質し其の罪

を陳謝せば則ち以て久安たるべし。正則既に妻子を江城に委ね忠を幕下に尽くす。

若し迷ひて返せず城に抛り拳兵せば、則ち正則も亦天下の諸軍に従ひ一戦し之を

破らんとす。久安と速亡と二者孰れ得たる。宜しく之を熟籌すべし」と。駿府記・松栄紀事

是日、片桐且元、騎士多羅尾半左衛門・日此加左衛門等二百余人を界津に遣はし之を援く。尼崎に至る。半左衛門の妻孥界津に在り。往き之を覓めんと欲す。定好の出奔を知らず。小舟を戌將建部政長に乞ひ、夜界津に至る。政所の門を敲く。甲士出で之を詰ふ。半左衛門、敵界津を奪ふを覚り急ぎ去る。敵騎之を追ふ。半左衛門力闘し遂に宗薫の家に入り火を縦ち自殺す。難波戦記曰、多羅尾半左衛門・富田太郎

助二人往界津覓妻子為的所困。半左衛門自殺太郎助亡去。今従家忠日記・徳川記・慶元記・今井彦右衛門家伝○按ずるに、半左衛門の自殺、難波戦記・冬夏事記四日に係く。戦記曰、且元不知半左衛門之死。十日遣援軍。或云、十日半左衛門自殺。十四日遣援軍。今按ずるに、茨城より界津に至るまで相去ること遠からず。四日より十日に至り半左衛門の事を知らざるの理無し。家忠日記・松栄紀事並び日せず。創業記考異曰はく、十三日、且に大阪の兵界津を掠せんとす。市正兵を遣はし之を救ふと。今之に拠り是日に係く大坂の兵

米二十万斛こく及び魚鳥菜蔬薪樵勝げて計ふべからざるを得、皆城中に運ぶ。又金銀を以て多く鉛玉・火薬を買ふ。是により城中の儲峙ちよじ豊足たり。松榮紀事 既にして且元の援兵尼崎に至る。船を建部政長に乞ひ將に界津に抵らんとす。池田越前・南部越後相議りて曰はく「東市正、秀頼の重臣なり。近く大坂に在り。情偽はそく叵測は（はかれない）。万一異図有らば悔及ぶべからず」と。遂に門を閉ぢ内いれず。且元の兵進退拠を失ふ。大阪の謀走り大野治房に告ぐ。治房 家忠日記・難波戦記作治長。今従冬夏事 紀部兵木村六兵衛父子に命じ三百余兵を率ゐ中島の土寇三右衛門をして之を撃たしむ。家忠日記・冬夏事記作北村三右衛門。以為土人。拠難波戦記、喜多村之里長而非土流也 且元の兵与戦し之を破る。六兵衛父子兵を分け二隊と為し進み之を撃つ。茨城の驍兵牧治右衛門・川島五兵衛・十河久兵衛以下悉く戦死す。僅かに存するもの五十余人。退保せんと欲す。伊丹の土寇蟻附し退くを得ず。伊丹の郷民且元の号令を奉うくと雖へども其の大阪に叛するを聞き一人として応ずる者無し。残兵茨城に還らんと

欲するも、土寇前を邀^とめ後を絶ち、悉く戦死す。秀頼大いに悦び六兵衛以下の土寇の、級を獲る者を賞す。家忠日記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事 冬夏事記曰、片桐且元憤池田越前・田宮対馬在尼崎城不救我兵之死。訴于京尹板倉勝重。勝重以健步報神祖。神祖大怒、使勝重詰問之。時、武蔵守屯西宮。勝重遣使問之。武蔵守大驚遣使尼崎問其故。戎将皆曰、兵寡不得出救。田宮対馬曰、尼崎咽喉之地、内府公面諭主公使以多兵戍之。而以兵寡為鮮（解）則必触内府公之怒。宜対曰、城兵欲出救之。田宮対馬固止之曰、尼崎城有海陸二途。敵誘我兵出戦。而自海路襲我則城不可保。不救市正之兵而使之尽死。不係天下之安危墮計失城。則悔何可及。往年信長公時、原田備中死于難波口、阪井右近死于堅田。近則武蔵守殿祖父勝入公死于長湫。皆侮敵輕出之所為也。雖是市正之兵而万一敵設奇謀詭為市正之兵。亦未可知、故与池田越前・池田美作相議不許一人出城。武蔵守牒其言於勝重。神祖覽之喜曰、輝政善用兵。至今有其遺風。後來尼崎城外雖有变而不可一人濫出。下令武蔵守褒之。難波戦記・大阪記並曰、神祖聞池田越前・南部越後不内且元之兵而善之。岩淵夜話曰、武蔵守之士伴大膳使于二條城分疏其事。三説各異。未知孰是。附以備考

十五日、神祖吉田に至る。

是日、大將軍下令し軍列を定む。家忠日記 蜂須賀至鎮、使を阿波に遣はし秀頼の拳兵を其父蓬菴に告ぐ。阿波守家政。致仕剃髮号蓬庵 蓬庵兵を率ゐ南海を航し吉田に泊る。本多正純に就き謁を請ふ。神祖、蓬庵に命じ江府に径往し大將軍に謁せしむ。家忠

日記・松栄紀事

十六日、尾張宰相義直兵を將ゐ名護屋を發す。其傳ふ成瀬正成・竹腰正次之に従ふ。

創業記・慶元記・年譜附尾

十七日、神祖名護屋に至り留すること一日。此より鷹を駿府に還す。年譜・創業記・

駿府記・還鷹拋難波戦記・浪花戦記

十九日、岐阜に至る。徳永量昌使を以て秀頼の陳謝書を献ず。本多正純之を上る。

神祖笑ひて曰はく「秀頼年少わかし。故に有楽・修理輩の誑惑する所と為り、以て不

軌を図る。実に哀れむべきなり。是春秀頼書を加賀利光に遣はし以て之を招誘す。

利光其書を駿府に上る。吾久しく其反心有るを知る。何ぞ之無しと謂ふ。虚偽信

ずるに足らざるなり」と。正純命を奉け檄を馳す。島津家久・毛利宗瑞・鍋島勝

茂・黒田長政・福島備後守忠勝 正則子。武家盛衰記曰、初名正元後改正勝。今從松栄紀事・武家

叙任・松平忠継・其弟忠雄・浅野長重・蜂須賀至鎮・加藤嘉明・森忠政・田中忠

政・生駒一正、其余鎮西中国の諸將、兵を率ゐ大坂に会す。駿府記・松栄紀事

是日、本多忠政平瀧に進陣す。諸書皆作枚方。国音相同。今拋鷲峯文集・細野藤敦墓誌。下倣之。

按ずるに、字瀧を写と書く。皆斥鹵(せきろ)之義無し。然れども俗に従ひ通用す 松平忠明淀に陣す。

美濃の兵之に属す。藤堂高虎大和路に趨く。おもむ 創業記

二十日、神祖柏原に至る。板倉勝重駅を飛ばし上言するに、大坂城中多く金銀を

以て市人を購ふ。或は二條城に行火しこうか或は大駕を狙撃すと。駿府記曰、大坂市人得黄金

五百枚為乞者欲狙大駕入京犯之。創業記曰、大坂城中使仮山伏六十余人放火二條辺。有人訴之捕二十余人。

浪花戦記曰、青蓮防(院カ)坊官杉本坊捕山伏二十人於粟田口。送板倉勝重之衛。勝重推鞠之。皆自首曰、

大野修理亮之歩卒也。勝重下之獄。乱平放出之事皆発覚し其党与を捕へ之を誅す。駿府記・松

栄紀事 是に先んじ、九鬼守隆、戦艦五十余艘を泛べ大阪に至り港口を塞ぐ。諸国の漕運及び商船を遏む。とど

是日、出で新家村に屯す。家忠日記

二十一日、松平政宗・上杉景勝各其兵を將ゐ江府を發す。創業期・慶元記 是日、大坂城兵郭外の人家を自焼す。徳川記・慶元記・難波戦記

二十二日、神祖永原に至る。勝重又上言す。界津監吏無く盜賊公行す。故に掲榜し之を禁ずと。神祖、竹中重信を安芸・備後に遣はし福島忠勝をして兵を勒しろく（軍を統御する）戦期に会せしむ。備後冶工多く亟やかに鉄盾を造る。前庭半入大阪より来。神祖城中の事を問ふ。対へて曰はく「淀殿諸將に号令す。故に士卒皆不平を懐く」と。

二十三日、神祖矢橋に至る。快船に乗り淀城に至り径ちに京師二條城に入る。片桐且元父子を召し大坂城中の事を問ふ。時に藤堂高虎京師に在り。亦之も召し大

阪城図を披き、池水の浅深を問ふ。且元・高虎と攻戦の謀略を議る。駿府記・松栄紀

事 高虎に謂ひて曰はく、「陣を置くは、須らく墨江を前に界津を後にすべし」と。

高虎対へて曰はく、「謹んで命を受く。然れども兵は敵に因り転化するを貴しとす。

陣営の排置は未だ予定すべからず」と。神祖其の対^{こた}へを善しとす。高虎行状 是に先

んじ、大將軍、軍列を定む。酒井忠世・土井利勝・安藤重信に命じ三条を下令し

軍士の剽掠（強奪）を禁ず。難波戦記

是日、大將軍江戸城を発す。世子留守す。酒井重忠・其弟忠利・内藤政長、庶務

を聞くに与^{あずか}る。高木主水正正次 主水助清秀子・朝倉宣長之に副ふ。米津勘兵衛・島

田兵四郎、街市を監る。越後少将忠輝・蒲生忠郷・奥平忠昌・最上家親・鳥居忠

政、留後を為す。福島正則・黒田長政・加藤嘉明皆関白秀吉の恩遇を受け其勢大

阪に敵し難し。故に江府に留む。平野長泰・谷衡好、駿府に在り。亦秀吉の恩眷

の士たる故に二人をして江府に來在せしむ。大將軍、発に臨み密かに忠輝を戒め

て曰はく「正則・長政等若し異図有らば速やかに誅戮すべし」と。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 越前少将忠直兵二万を将ゐ、松平利光兵二万を将ゐ江府を発す。冬夏紀事（事記）・慶元記 諏訪頼水甲府城を成り、渡辺囚獄祐盛沼津城を成る。小笠原安藝守信盛 松栄紀事曰、時十一歳・小笠原新九郎廣信、相州三崎沿海を成る。向井兵庫助、豆州走水を成り、松平清昌参州本阪を成る。遠山友政桑名城を成り、内藤信正長濱城を成る。戸田氏鐵膳所城に在り、本多康俊之に副ふ。其余処所の城堡警衛嚴備たり。松栄紀事 大將軍の前鋒第一、酒井家次・松平忠良・松平忠義・設楽甚三郎貞光・小笠原若狭守・禰津小五郎是宗・水谷勝隆・仙石兵部大輔忠政 徳川記・松栄紀事並作好俊。今拠武家補任訂之・仙石大和守久隆・相馬大膳亮利胤 松栄紀事作清胤。按ずるに、系譜相馬氏、清胤無くして長門守義胤の子大膳亮利胤、難波の役に扈從す。今之を訂す・六郷政乗。第二、本多忠朝・眞田河内守信吉 伊豆守信幸長子。松栄紀事作伊豆守信次誤。按ずるに、眞田系図伊豆守信次といふ者無し。今難波戦記・前車後語集に拠り之を訂す。下之に倣ふ・秋田實季。

浅野長重・松下重綱・植村主膳正康明・一色宮内大輔・芳賀撰津守。第三、榊原
康勝・松平康長・北條出羽守氏重美濃守氏盛子・成田左衛門尉・丹羽長重。第四、
土井利勝・佐久間安政・其弟勝之・森忠政・堀淡路守直重監物直政第二子丹波守直奇弟・
筒井主殿頭定慶或作正次。今從和州諸將傳・松榮紀事。諸將傳曰、順慶甥称藤五郎。順慶養之為第二
子・溝口伊豆守善勝伯耆守秀勝第二子。伯耆守宣勝弟・高力高房・由良貞繁。第五、酒
井忠世・細川興元・牧野駿河守忠成・脇坂主水正・土方掃部頭雄重河内守雄久第二子・
新莊直定・杉原伯耆守長房七郎左衛門家利子。初称弥平太・鳥居成次・稻垣重綱。松榮
紀事作重種。今抛寛永系図訂之 麾下、本多大隅守忠純正信子実正信第二子安房守政重子。正信養
孫為子○按ずるに、諸書本多正信、扈從の列に在りと。創業記に抛れば正信江戸を発すること十一月上旬に
在り。下文に見ゆ。蓋し其軍列を定むること此の如くにて扈從に非ざるなり。故に書かず・立花重茂・
其弟主膳正直次・前田大和守利孝利家第四子。利長弟・日根野吉明・岡部美濃守宣勝
内膳正長盛子・藤田忠季・菅谷左衛門尉範貞・秋元越中守富朝但馬守泰朝子及び那須・

由利・蘆田・津金の兵之に従ふ。島田次兵衛重次 按ずるに、島田次兵衛利政、元龜三年三

方原の戦に見ゆ。其の後慶長五年八月水戸城に使す。重次豈に其子ならんや、家系未詳 ・三枝平右衛門

昌吉旗奉行と為る。昌吉後任土佐守 小林勝之助正次・米津梅干之助康勝・水田善左衛

門・多門縫殿助信清・安藤正次・小宮山又七郎・戸田光定・伊東右馬允政世・小

阪新介・松田六郎左衛門定勝、槍奉行と為る。小澤瀬兵衛忠重・青山善四郎重長・

内藤右衛門尉・山田重利・朝比奈源六郎正重・安部正之・今村彦兵衛重長・牟礼

郷右衛門・近藤勘右衛門用政 石見守康用第三子。登之助秀用弟 ・石川又四郎政信・渡邊半

四郎宗綱・村瀬重治・中川半左衛門忠勝・溝口外記常吉・鵜殿石見守氏長・兼松

源兵衛正成等使番と為る。秋山平左衛門昌秀・荒川又六郎忠吉・中山照守・神谷

與七郎清正・山角又兵衛正勝・伊東長兵衛弘祐 家忠日記作新十郎。今從松榮紀事 諸武器

を監る。山岡五郎作景長・加藤伊織則勝・永井白元・高木九兵衛正次・木村源太

郎元正目付と為る。浅野六之助道多・五味金右衛門豊直 家忠日記作金十郎。今從松榮紀

事・柴山九右衛門正信・須田二郎太郎廣莊・市川茂左衛門満友・青木小右衛門・高田小次郎直政・藤川勝二郎重勝、軍営を点定（改め正す）す。朝比奈彦右衛門眞直・内藤平右衛門幕奉行を為す。総二十万。江府より伏見に至る兵馬旌旗絡繹（次々と）として織の如し。家忠日記・松栄紀事

二十四日、勅使廣橋権大納言藤原兼勝・三條権大納言藤原實條、二条城に来、神祖を勞問す。神祖之を出で迎ふ。西州の諸侯京師に在る者皆来謁す。年譜・創業記・

駿府記・家忠日記・松栄紀事 大將軍藤沢に至る。蜂須賀蓬菴来謁す。家忠日記・難波戦記・松

栄紀事

是日、戌を東海・東山二道に置く。符契無き者過ぐるを得ず。創業記 佐竹義宣兵を將ゐ江府を發す。難波戦記

二十五日、地大いに震ふ。盧舎悉く倒る。年譜・創業記・難波戦記・松栄紀事 神祖、藤堂高虎及び諸臣を召して曰はく、「筑紫の諸軍未だ来会せずと雖へども須らく先づ魁

兵を以て城を攻むべし」と。即ち高虎を以て前鋒と為し片桐且元軍監と為る。副
ふるに、越前少将忠直・本多忠政伊勢の兵を以て相繼して進む。大和の諸将を以
て高虎に属せしむ。駿府記・家忠日記・松栄紀事 忠直及び大和の諸将墨江・界津の間に
陣す。高虎墨江を背にして陣せんと欲す。監使眞田信尹・横田重量皆曰はく「宜
しく欽命の如くすべし」と。高虎曰はく「相攸三利有り。東に池沼有り、西に岸
壁有り、後に松林有り。敵を前に受く。一方に之を制するは甚だ易し。若し喪師
敗軍せば則ち罪吾に在り。諸君に累せざるを庶ねがふなり」と。諸将乃ち出で墨江の
北に陣す。高虎行状

二十六日、織田常眞来謁す。神祖、其流落を矜あわれみ采邑を給するを約す。駿府記

二十七日、僧崇傳・林道春をして五山僧徒に冠族の家録凡そ三部を謄写するを命
ぜしむ。一部は禁庭に献じ、一部は駿府に一部は江府の書庫に蔵す。駿府記・松栄紀

事

是日、大將軍三島を發し諸軍をして兼行せしむ（倍の速度で進む）。創業記・家忠日記・松榮

紀事 和州の諸將河州国府に来、藤堂高虎軍と合す。高虎兵を將ゐ火を河州の聚落

に縦ち歸り国府に屯す。はな家忠日記・慶元記

二十八日、大阪城を逸るる者有り。召し二條城に至らしめ城中の事を問ふ。対へて曰はく、「城兵三万余人、武器芻糧一つとして闕くる所無し」と。慶元記・難波戦記

是日、織田有樂・明石守重・後藤年房・中島氏種、兵を率ゐ大阪城を出で陣を張り、我兵と相對す。一本難波戦記曰、北川三郎兵衛筆記作二十一日。慶元記・見聞記、東西合軍等書作二十

八日。未知孰是。按ずるに、本書曰はく、播磨の兵と相對す。播磨の主將松平利隆なり。是時西宮に屯す。進み大阪に迫るか。未詳。故に主將誰某かを書かず

二十九日、藤堂高虎進み大仙陵に屯す。一本難波戦記曰、世俗称仁徳天皇之陵。曰大仙陵。抛

延喜式仁徳天皇葬百舌耳原陵。大仙陵在和泉 新宮若狹守 一本戦記曰、若狹守或作左馬助。按ずるに、

明年五月岡山の戦。慶元記も亦若狹守と作す。蓋し更称なり 兵を率ゐ界津より大阪城に入る。

高虎の營前を過ぐ。朝霧昏濛として前鋒渡邊了之を覺らず。敵兵過ぎ去り、方に之を知る。追撃するも及ばず。高虎之を聞き大いに怒る。其太閤の恩顧の士たるを以て、恐らくは、人有り、其故に之を縦ち城に入るるを議ると。是れより高虎、了と相失す。諸將皆謂ふ、高虎は太閤の恩遇する所、宜しく以て前鋒を命ずべからず。須らく勲旧を以て前鋒と為すべしと。神祖曰はく、「吾能く高虎の無貳を知る。故に之を任せ疑はざるなり」と。徳川記・慶元記・難波戦記 神祖、中島の、舟に非ざれば渡るを得ざるを憂ふ。伊奈半十郎忠政を召し之を問ふ。忠政備前守忠次子。後称筑後守 忠政対へて曰はく、「其上流を塞がば則ち水涸るべし」と。乃ち忠政に命じ福島忠勝・毛利秀就の衆を役し、えき吉田了以をて、在る所の淀川の船数百艘にて、土石を運び上流を壅塞せしむ。よっそく竹木を編み堰と為し堤を築く。狭田宮堤成り水乾く。八幡・平瀨往来に便を得。東方、兵を備へずして城兵出づるを得ず。大いに防禦の利を失ふ。故に城兵之を壊さんと欲す。

十一月朔、大坂隊將根来正徳寺先臣城所友仙曰、正徳寺号知徳院、根来法師也二百余騎を率ゐ出で堤を壊さんと欲す。神祖予め之を慮り、伊勢・美濃の兵をして平瀧に屯せしむ。二百人を率ゐ鳥銃を列し堤下に備ふ。正徳寺前に来るを見鳥銃を連放す。

敵兵退走す。追撃し六七級を獲る。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 鷲峯文集・伊奈忠次

碑曰、元和元年夏忠政従難波之役。戍淀河積土囊断長流。一夕夢父忠次帯甲胄揮陌刀諭忠政曰、天下勝敗在

此一挙。敵放火箭則築具焚滅。宣設其備。防護勿懈。忠政驚覺。如其言。既而築成功遂。水運不通難波塹池

乾涸。且於鴨野接槍斬七級。凡固隊所得首総三十級。按ずるに、築堤遏流は此時の事にして明年に非ず。夏

講和の後に塹池皆平池と為す。志貴野戦も亦是月二十六日に在り。蓋し碑文家伝の謬を承け明年の事と為す

なり。附以備攷

是日、藤堂高虎進み住吉社の北に陣す。林木を背にし丘陵に拠る。家忠日記・徳川記

二日、大將軍名護屋に至る。神祖、大將軍道を倍し兼行し士卒甚だ疲労するを聞

く。書を以て之を戒め其行程を緩にす。駿府記・徳川記慶元記・難波戦記 福島正則の宗隆(臣)

福島丹波の子長門、父の為に絶たれ、舟を住吉の海上に泛べ將に大阪城に入らんとす。藤堂高虎の此に在るを知らず、上陸し大阪に導き之^ゆを請ふ。高虎の兵之を撃ち殲し住吉に梟首す。慶元記 城將郡主馬首良列、高虎孤軍兵寡きを見、之を襲撃せんと欲するも速水守久聴かず。事遂に寝^やむ。家忠日記・徳川記・難波戦記、諸書皆云、

速水甲斐守・郡主馬皆欲襲之衆議不一而止。扨明年五月七日良列臨死之言、則良列首謀而守久沮之也。故今

訂之 東軍前鋒の諸將、摂津・河内の間に屯す。遷延し進まず。創業記

三日、神祖、監使山城宮内少輔・瀧川正弘・城和泉守昌茂 武田信玄土意菴子 ・鈴木

久右衛門・横田重薰^(重)・眞田信尹・初鹿野傳右衛門を遣はし、高虎をして大阪城に

迫らしむ。松平忠明進み平野に陣す。創業記・松栄紀事

四日、忠明及び濃州の兵飯盛山に至る。家忠日記

五日、藤堂高虎の前鋒渡邊了・藤堂良勝・藤堂高則出で平野の形勢を視る。城將

薄田兼相・山口弘定出で平野を略す。高虎の前鋒及び忠明来^す前むを見、城中に入

る。了等平野に入り使を高虎の陣に遣はし其兵を趣く。松栄紀事曰、兼相・弘定等委積器械走入城中。了等入平野収器械。按ずるに、城兵未だ嘗て接戦せず。応ぜず狼狽し此に至る。家忠日記・慶元記但し云ふ、兵を収め引き去ると。今之に従ふ○大阪記曰、高虎遣使渡辺勘兵衛之陣。曰、我欲越竜田入河内路。宜進前軍。勘兵衛対曰、敵既在近。山路險難。其変難測。宜審虚実。然後進兵。高虎怒親往勘兵衛之陣責之曰、我聞汝武功之士。今敵距此五里。汝何怯也。自是君臣不相協。按ずるに、了、高虎と相失す。新宮若狭守朝霧に乘じ城に入るに由る。上文に見ゆ。故に取らず

六日、大將軍永原に至る。留すること三日。以て後軍の至るを待つ。年譜・創業記・

家忠日記・徳川記・慶元記 城將大野道見 諸書多作道犬或道賢。今從松栄紀事 扱難波戦記、大野氏兄弟次序、修理亮治長、主馬助治房、吉岐守治氏。道見其季弟也 火を天王寺に縦ち以て我軍營を擾す。みだ

伽藍一時に灰燼す。創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 藤堂高虎、兵を按へ動かず。親ら平野に至る。前鋒を住吉に進む。城兵新宮若狭守及び根来僧徒等二百余騎界津近邑ろじやくに鹵掠ろじやく（掠奪）す。松栄紀事作焼界津原野。按ずるに、是に先んじ、城兵既に

界津を陥す。冬夏事記曰、若狹守等与赤座内膳・榎島玄蕃在界津侵掠。今從之 高虎の兵の速やかに至るを意おもはず。渡邊了の旗を見、其の後を絶つを恐れ、回り城に走り入る。若狹守猶ほ界津に在り。侵掠や輟まず。高虎及び松平忠明・石河忠總等大軍旌旗近きに在り。大野治房使を馳せ若狹守の入城を趣つなす。若狹守猶ほ未だ之を信ぜず、徐おもに界津を出で住吉南原に至る。忽ち渡邊了の陣を見驚き走る。高虎の兵之を追撃せんと欲す。了之を止めて曰はく「此れ敵伏兵を界津に留め我軍の後を邀るの計なり」と。竟に追ふを許さず。若狹守僅かに城に遁れ入る。時の人、了の機を失ふを咎む。冬夏事記○難波戦記・松榮紀事並云、勘兵衛持（待）主將命故不出兵。時人咎之。按ずるに、了、

機を見兵を發す。高虎の号令を待たず。下文矢尾堤之戦、其方略可見慮敵邀後。蓋用意大過也。冬夏記事実

頗詳。今從之 高虎、和州諸將松倉重正・奥田三郎右衛門忠次・神保相茂等と合せ一万余兵住吉北の高岡に出陣す。松榮紀事本書曰、城將眞田左衛門佐・後藤又兵衛等欲夜襲之。城中

老臣宿將未及部分城門防禦。而畏我兵急攻入城。無復出戦之志。故不果。按ずるに、大阪城守日に久し。豈

に未だ城門の防禦を部分けするに及ばざるの理有らんや。蓋し老臣宿將新進の諸將と軍議協せざるのみ。故不取 浅野長晟、兵一万余騎を將ゐ和歌山を発す。吉野・熊野の賊其虚に乗り新宮城を取らんと欲す。長晟の陪臣戸田六郎右衛門 長晟家老浅野右近之臣 宮川を涉り之を急撃す。賊敗走す。有田・日高の賊大阪の令を受け長晟の軍を邀む。長晟二千余兵を分け遣はし之を撃破し三千余級を獲る。長晟、泉州大鳥に屯す。神祖、長晟を以て藤堂高虎に副ふ。故に高虎の營に至り軍事を議り大鳥に還る。

七日、長晟、陣を高虎の陣左右妻に移す。 家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記作今在家。今

従松栄紀事 中国の兵相踵し来集す。神祖、使を遣はし松平利隆を戒めて曰はく「神崎は大川なり。船役を備へ渉るべし。慎み士卒を傷損する勿かれ」と。利隆、柳北半助を遣はし水の浅深を測る。水深く渉るべからず。乃ち舟筏を見る。利隆の弟忠継時に十六歳。

是日、馬を下流に馳せ流を絶ちて渡る。戸川達安・花房職之等七千余騎 くしほみ 鑣を並べ

て渡る。利隆之を見怒り亦衆を麾きして（指揮して）渡る。森忠政・有馬豊氏相継ぎ岸に臨む。城兵戎船を置き渡口を扼おさふるも一矢も発する能はず退走す。忠継及び達安の兵追撃し多く首級を獲る。忠継小和田に陣し將に中島を取らんとす。神祖、利隆・忠継輒ち神崎を渉るを聞き以為へらく、中島は枢要の地、二人神崎の捷に狃なれ輕易に水を渡れば則ち必ず兵を損すること多しと。乃ち城昌茂を遣はし之を監しむ。利隆其の忠継に後るるを憤りて銳意水を渡らんと欲す。城將織田有楽・渡邊尚・後藤年房及び七隊の兵一万余騎中島に出で備ふ。利隆進み之を撃たんと欲す。昌茂之を扼へて曰はく「敵衆く我寡なし。彼主戦にして我客戦なり。險易同じからず。主客の勢異なる。兵を按おさへ彼動靜を視るに如かず」と。利隆必ず水を渡らんと欲す。昌茂大声して曰はく「我大御所の命を銜うけて来たり。我言即ち大御所の言なり。聴かざるべからず」と。安倍正之たまたま適来、軍中に在り。昌茂を曉諭す。昌茂聴かず。利隆已むを得ず軍を収む。敵將其渡水せざるを見引き城中に入

る。其夕忠継、舟筏を以て中島下流を渉る。戸川達安・花房職之等敵を撃ち数十級を獲り、遂に中島を取る。利隆之を聞き臍ほそを噬かむも益無し。神祖書を賜ひ忠継の功を褒む。駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事

十日、大將軍、軍容を整へ伏見城に入る。義直・頼宣追分に至り之を迎ふ。諸卿百官及び僧侶大津或は追分に至り謁を執る。駿府記・松栄紀事

是日、後陽成上皇、僧正天海を以て使と為し類聚三代格六卷・年代略十九卷今按ずるに、藩邸書庫所有日本紀略是り・類聚国史二卷及び古語拾遺・名法要集・神皇系図を借し送る。駿府記 本多正信、関東諸城留寄の任を処分し兵を帥る後拒を為す。

十日、正信名護屋に至る。創業記

十一日、大將軍二條城に入り神祖に謁し出軍の期を待つを謝す。軍事を議り、本多正純・成瀬正成・安藤直次・板倉勝重・酒井忠世・土井利勝・安藤重信に命じ出軍の期を定む。伏見城に還る。今井宗薫・宗吞父子大阪城を逸れ京師に詣づ。

神祖之を勞ふ。駿府記・松榮紀事

是日、松平忠利・伊奈忠政をして神崎鳥養の堤を壊し其水を落とさしむ。駿府記

十二日、尾張宰相義直伏見を発し木津に陣す。大阪城將又守禦の方略を議る。新進の輩請ひて曰はく「將軍近日天王寺に到る。其陣列未だ定まらざるに乘じ急襲し之を撃たば則ち必ず利有り」と。大野治長曰はく「小戦に此術を用ゐるべし。

大戦には不可なり。今天下の大兵と接戦す。初戦に利を失はば則ち再戦は必ず難し。敵の堅城の下に致り我鋭兵を以て之を挫くに(如)知かず。則ち一以て十に敵すべ

し」と。七隊長も亦之を然りとす。新進隊將眞田信仍・長曾我部盛親・仙石宗也・

後藤年房・明石守重等皆曰はく「用兵は不意を撃つを以て要と為す。今関東大軍と合戦す。苟しくも奇を用ゐ決するに非ざれば勝つ能はず」と。治長等聴かず。

議遂に寝むや。難波戦記

十三日、横田重量・山城宮内少輔大阪より来。前軍諸將に告げ城に迫りて陣す。

神祖命じて曰はく、「大將軍未だ下令せざる以前に輕^(戰)を許さず」と。駿府記・難波戰

記・松栄紀事

是日、酒井忠世・土井利勝・安藤重信をして三条を下令せしめ、軍士に剽掠・放火を禁ず。家忠日記・冬夏事記

十五日、神祖二條城を發し木津に至り里長の家に入る。扈從の士皆各陣營に就く。

俄かに下令し南都に赴く。士皆焉^{これ}を怪しむ。蓋し厨下の執役に異色人有り。事發覺し即ち之を逮捕す。人其故を知る者無し。晡時^{ひぐれ}南都に至る。中坊秀政家に宿る。

觀世宗雪の部屬延命善四郎を召し演謡を歌ふを命ず。人心始めて安んず。難波戰記・

浪花戰記

是日、大將軍伏見城を發し平瀨に至る。

十六日、神祖法隆寺に至る。大將軍岡山に陣す。是に先んじ、内藤政長及び子帶

刀忠具^(興)、房州を守る。松栄紀事。按ずるに、上文十月二十三日政長江府に在り。留守の命を蒙る。忠

具（興）大阪に赴く、蓋し其前に在るなり。今本書に拠り此に書く 忠具、大阪の役に与あずかるを得ざるを憾み頻りに其の父に請ふ。政長已むを得ず兵二十騎・卒百余人を授く。忠具伏見に至る。本多正信に就き従軍を請ふ。正信、其の檀ほしいままに守る所を離るるを咎む。然れども言はざるを得ず。神祖之を聞きて曰はく「少壯輩宜しく従軍するを得ざるを以て遺憾と為すべし。其真情ゆる恕すべし」と。乃ち之を召す。松平康長、忠具の妻の父なり。故に之をして康長の隊に在らしめ以て従軍せしむ。松栄紀事 山口重政譴を蒙り武州龍穩寺に潜居す。深く従軍するを得ざるを以て憾みと為して曰はく「今我亡命し大阪に至らば則ち秀頼必ず我を容る。隙を伺ひて之を刺すべし。然らずんば当に城中の将帥を殺すべし。然れども告げずして行かば則ち以て我忠を明らかにする無し」と。乃ち妻孥を江城に移し以て質と為し書を土井利勝に投じ將に大阪に赴かんとす。箱根の関に至る。吏之りを過り過ぐるを許さず。東山道を歴城へに入らんと欲す。利勝、本多正信と命を奉うけ復書し固く之を止む。故

に其の志を遂ぐる相(能)はず。鷲峯文集・山口重政碑文・松栄紀事

十七日、神祖、住吉に陣す。從兵始めて擐甲す。大將軍平野に陣す。年譜・創業記・

駿府記・家忠日記・冬夏事記・松栄紀事 難波戦記曰、薄暮大雨。從軍皆垂帷幕。大阪城兵夜出襲之。即幾不可当。城將衆議不一。竟不出兵 諸郡(軍力)の陣列を部分けす。佐竹義宣・上杉景勝・

堀尾忠晴・京極高知・本多忠朝・眞田信吉・其の弟内記信政 拋浪花戦記、信吉兄弟皆年

少勇銃(銳)。以叔父左衛門佐在大坂為謀主。避嫌疑張陣先于諸將、悉力攻城。時人称之。難波戦記曰、眞田

伊豆守之臣禰津但馬・半田筑後・榊原石見皆長戎事。不避鉛彈雨注向城設攻具。先于諸軍。木村長門守見之、

謂眞田左衛門佐曰、認敵旌旗豈卿之族耶。設死(施力)攻具妙得其術。大將為誰。左衛門佐答曰、二少年先衆指揮。一則河内守年十五、一則内記年十四。皆伊豆守之子。而吾之姪也。長門守大称之曰、二人常擐何等

鎧。当物色之。戒士卒不使放銃中之。附以備考 浅野長重・松平丹後守光重・牧野忠成・西尾

豊後守忠政 隱岐守吉次第二子、丹後守忠永弟・徳永量昌・酒井家次・其子宮内大輔忠勝・

榊原康勝・京極忠高・其弟修理大夫高政・毛利伊勢守・菅沼定芳・伊東祐慶・本

多康俊・福島備後守正勝 刑部少輔正之叙從四位下任侍從備後守更名正勝・松下重綱・植村

康明・禰津是宗・秋田實季・仙石忠政・六郷政乘・相馬利胤。松平忠良・設楽貞

光・水谷勝隆・保科正光・松平康長・松平信吉・新莊直定等、東方青屋口今福に

陣す。松平定綱大番騎士を率ゐ其側に陣す。松平利光南方岡山に陣す。越前少將

忠直其後に陣す。藤堂高虎・井伊直孝其西に陣す。大和將士及び生駒一正之に従

ふ。尾張宰相義直・遠江宰相頼宣、神祖の營前に陣す。麾下の諸士今宮茶磨山間

に陣す。難波戦記曰、茶磨山隔天王寺可五町、西南有荒陵。俗謂之茶磨山。神祖准閑原之吉兆是其名曰勝

山 浅野長晟・松平忠雄・蜂須賀至鎮・鍋嶋勝茂・松平忠義・寺沢廣高等今宮北海

浜に陣す。松平政宗、今宮道路を跨ぎて陣す。金森可重・小出吉英其東に陣す。

松平利隆・其弟忠継・森忠政・有馬豊氏・戸川達安、其北中島・神崎に陣す。難波

戦記、諸將陣列与此有異同。今從松栄紀事 榊原康勝攻具を設け竹牌を列す。城兵火銃を放ち

之を撃破す。康勝の兵鳥井半六衆に挺ぬきんぢ独り進み再び竹牌を建つ。衆其の勇を

称む。難波戦記 神祖、眞田信尹を召し謂ひて曰はく、「汝城に入り姪左衛門佐に帰順を勧むべし。然らば則ち信州の地を左衛門佐に給ふ」と。信尹城に入り旨を伝ふ。

信仍謝して曰はく、「深く内府公の眷遇を体す。然れども臣往年石田三成に党し寡軍を以て大將軍に抗す。故に罪を懼れ高野山に遁る。而るに秀頼公、臣を以て無似ぶじ

(愚か)と為さず数千の兵を授け方面の將と為す。其恩郡国を封ずるより重し。士は知己の為に死す。敢へて命を奉けず決せん」と。信尹復命す。神祖又信尹を遣はし之に強ふ。信仍固く之を拒みて曰はく、「貪利忘恩は士の道に非ず。臣一死を以て秀頼公に報ゆ。若し両軍和親せば則ち臣叔父に養はれば足れり。争戦未だ止まらずは則ち日本の半ばを給ふと雖へども亦従ふ能はざるなり。請ふ、叔父再び来る勿かれ」と。遂に之と絶つ。関原記大全・難波戦記二書並曰、神祖謂隠岐守曰、左衛門佐未降則当

給采地一万石于信州。及復命又謂隠岐守曰、当給信州全図。按ずるに、神祖、信仍を招かば則ち或は之れ有らん。利を啗はし市賈(商人)の如かるべからず。蓋し後の人之を傳会し言ふ。故に但だ信州の地と云ふ 初

め向井忠勝命を奉け子五郎八と相州三崎を出づ。父兵庫助三崎を成り風濤險悪たるを以て之を止む。忠勝聴かず。船一艘に乗りともしなを解く。船一艘従ふ。険を冒し進む。其余の戦艦相継して発す。暴風雨雪舟行くを得ず。戦艦皆三崎に還る。夜に入り風力益猛し。忠勝親ら艫を操り衆を励まし経ること三日、勢州亀島に泊す。従船漂蕩し之く所を知らず。忠勝及び従士皆困憊す。

是日、傳法院に泊す。戦艦日を経方に到る。徳川記・慶元記・難波戦記・年譜附尾 神祖、我兵の大和に入り抄掠し神祠仏宇を焚くを聞く。西尾忠政を遣はし之を禁ず。創業

記・徳川記 久世廣宣・阪部廣成監使を為す。難波戦記本書曰、久世三四郎・阪部三十郎属大須賀

康高著勇名。十三年正月二人有故去横須賀屏居武州所沢。凡七年。及大阪兵起神祖积而召之。故有是命。二

人榮之 鎮西諸軍来会す。城将、天満の地広く守り難きを以て自ら天満の営を焼き城

中に引き入る。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 慶元記曰、初秀就（頼） 招島津家久。城将相議、

家久大家也。宜使其兵守天満。而家人不来応無兵可守。故焼之 是により松平利隆・其弟忠継・森

忠政・池田長吉・有馬豊氏・加藤式部少輔明友左馬助嘉明子・福島正勝・関一政・松平康重・戸川達安及び細川忠具(興)・黒田長政の兵皆天満に入る。攻具を設けて陣列す。京極忠高・片桐且元・其弟元重及び濃州の兵平瀧に出で将に前嶋に入り備へんとす。九鬼守隆・小濱久太郎・向井忠勝・千賀孫兵衛・千賀與八郎等船艦を傳法院の水浜に列す。兵馬充塞し大阪の四面尺地を遺さず。松栄紀事

十八日、神祖、茶磨山に登り諸軍を望む。大將軍平野營より来謁す。藤堂高虎・本多正信を召し攻城の方略を議る。塹陞を鑿ち土山を築き以て城に迫る。年譜・創業

記・駿府記・徳川記・家忠日記・松栄紀事 高虎鳥銃三十口を茶磨山に列し以て不虞ふぐに備ふ。

駿府記

是日、舟師、福島新家村を攻めんと欲す。難波戦記曰、新家村在天満之西 九鬼守隆・向井忠勝・千賀与八郎・小濱久太郎等放銃争戦し敵船数隻を奪ふ。難波戦記 城将大野治房・薄田兼相、明石丹後守をして穢多城を守らしむ。戦艦二千余艘(十)を泛べ淀川

尼崎往來の船を却剽(劫)す（おびやかす）。蜂須賀至鎮・浅野長晟、本多正純に言ひて曰はく「敵穢多崎の險要を時(恃)み守禦甚だしくは牢固たらず。我、水に沿ひ急攻せば則ち之を抜くは難からず」と。正純之を白す。神祖曰はく「兵を損ぜずして之を抜くは甚だ善し」と。

十九日黎明、至鎮兵を發す。長晟の候騎、長晟に言ひて曰はく「此城褊小にして両將の兵を勞するに足らず。蜂須賀一將にて足れり」と。長晟之を然りとし、帰營す。至鎮大衆を率ゐ大坂の戎船を攘斥し進む。陸路より兵を分け乗船し葦島に入る。城兵之を拒ぐ。至鎮の兵奮撃し之を破る。城兵潰走し仙波に入る。遂に之を抜く。至鎮、使を住吉に遣はし捷(かち)を正純に告ぐ。神祖予め横田重量・眞田信尹・

安藤正次・本多藤四郎を穢多崎に遣はし之を監しむ。 堀内藤家譜、藤四郎内藤四郎左衛門

正成第三子。冒母氏称本多氏 至鎮曰はく「嚮(さき)に已に使を遣はし之を報ず。他兵を交へず。

手下の兵を以て之を取る」と。至鎮の前鋒山田織部・樋口内蔵助歩騎を指揮す。

森甚五兵衛・森甚太夫、舟師を指揮す。各功有り。四使住吉に還り具ついでに其状を言ふ。神祖之を褒む。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・難波戦記・冬夏事記・松栄紀事

是日、大將軍住吉營に謁し軍事を議る。本多正俊(信力)・正純父子・藤堂高虎・安藤直次・成瀬正成等座に侍す。神祖之に命じて曰はく「須らく鳥養の地を鑿ち淀川に達し其上流を塞ぎ以て天満の河水を涸らすべし」と。大將軍令して曰はく「諸軍力を以て城を攻めば必ず士卒を損ず。慎み急攻する勿かれ。宜しく竹牌を列し城に迫るべし。地道を鑿ち以て樓櫓を毀てこぼ」と。駿府記・松栄紀事 藤堂高虎進み天王寺口黒門に向かひ陣す。

二十一日夜、人有り、来て住吉營を偵うかがふ。戍兵之を捕へ従り来たる所を問ふ。対へて曰はく「藤堂和泉守の營を覓もとめ塗みちに迷ふ」と。高虎天王口に陣す。而るに此に来。戍兵之を怪しみ按驗するに一封書を得たり。其人低声に語りて曰はく「此れ秀頼公、和泉守に賜ふる所の書なり。和泉守・浅野但馬守皆太閤恩顧の人なり。」

今関東の命に従ひ大阪城を攻むと雖へども密かに志を城中に通じ衣服・酒食を獻ず」と。戍兵其書を上る。書辞以て為すに、今宿謀の如く大御所父子を誘ひ深く我地に入れよ。宜しく亟やかに関東諸軍を諭し其後を断つべし。功成らば汝を大國を以て封ずること約の如しと。神祖之を覽て曰はく「此れ敵、高虎を離間するの謀にして事甚だ浅劣。吾何ぞ彼の計中に墮ちんや」と。即ち高虎を召し其人及び書を賜ひて曰はく「宜しく此人を黥すみし火を城中に放ち以て将来を懲らせ」と。

高虎状に感じて退き拷掠こうりやくし実を得。乃ち大野治房の兵なり。冬夏事紀曰、治房兵吉川新

藏 高虎其の手足の指を截り秀頼の二字を以て黥す。治房の紋を紙旗に書き其背に挿し板に載せ城門外に昇かき至り之を棄つ。城兵之を見大いに沮くじく。諸将皆神祖の

神武英略に服す。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・慶元記・高虎行状・松栄紀事

是日、城兵監江甚助、書を松平利隆に遣はし利を陷はし其来叛を誘ひて曰はく「当に備前・播磨・美作三国を給ふべし」と。利隆其使を捕ふ。書を併せ之を行営に

状す。駿府記・徳川記・松栄紀事給三国。抛冬夏事紀

二十三日、大野治長書を松平忠雄に遣はして曰はく「日本諸大名皆志を右府公に(秀頼公)

通ず。卿須らく亟やかに来帰すべし」と。忠雄其書を献ず。駿府記・松栄紀事並曰、治

長寄書忠雄所領淡路。按ずるに、此時忠雄今宮北に陣し、淡路に在らず。今之を訂す。治永(長)又書を忠雄

の重臣に遣はして曰はく「淡路州民悉く大阪に属す。宜しく城を翻し帰順すべし」

と。重臣其使六人を捕ふ。其の書を併せ之を行營に献ず。福島正勝も亦秀頼の書

数封を献ず。駿府記・松栄紀事

是日、松平利隆、福島新家村の敵を撃ち之を敗る。家忠日記・徳川記・松栄紀事 大將軍、

本多忠政に命じ伊勢の兵を率ゐ平野を去りて行營の前に陣せしむ。是に先んじ、

松平信吉、岸和田城を守る。是に至り北條氏重をして信吉に代へ之を守らしむ。

京極高知・京極忠高陣する所の今里、敵城に進(近)し。故に築城し信吉をして牙城を

守らしむ。新莊直定羅城を守る。家忠日記・松栄紀事 上杉景勝志貴野に軍し、佐竹義

宣今福に陣す。難波戦記・松栄紀事曰、大和川南曰志貴野堤、世称蒲生堤。北曰今福堤 兵合はせ八

千余人浪花戦記 二堤相並び泥淖どろ深く阻む。城兵列柵すること三重。志貴野口

門を闔とぢ銃卒更番し之を戍る。(大)天野治長の部将矢野和泉守正倫旧中村伯耆守一忠之臣。

一忠卒為僑人入大阪城・飯田左馬允家貞等五十余騎 松栄紀事作五百余騎。今從徳川記・慶元記・

難波戦記。浪花戦記曰、正倫守今福家貞守蒲生。井上五郎右衛門守志貴野。抛下文。佐竹義宣前鋒自堤下進

闔。蓋蒲生堤也 今福を守る。我兵四面に城下に迫る。榊原康勝・本多忠朝・松平康長・

丹羽長重・堀尾忠時・成田左馬助等大和川上流に陣す。松栄紀事

二十五日、諸将に命じ州河州の蘆荻を艾からしむ。伊奈忠次をして堤を築かしむ。

春日井木津川に通し以て天満の河水を涸らす。徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記 佐竹

義宣軍を今福東の聚落に移す。大將軍、安藤正次・屋代勝永・伊藤政世を遣はし

義宣の軍を監しむ。佐久間政實・小栗忠政、景勝の軍を監る。直江兼続監使に謂

ひて曰はく、「主将昨日来至す。軍長途を経皆疲労す。請ふ、士馬を休め然る後に

従事せん」と。政實・忠政曰はく「聞くに、謙信以来長途を経ると雖へども来たり輒ち敵と戦ふと。何すれぞ此の如き」と。兼続曰はく「然れば則ち明旦出戦せん」と。冬夏事記

二十六日、昧爽まいそう（未明）今福志貴野之戦、年譜・家忠日記・松原（栄カ）紀事係二十五日。今從創業記・

駿府記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・浪花戦記 正次・勝永・政世、志貴野に至る。

大野治長の銃手隊長井上五郎右衛門志貴野柵を守る。兵纔かに三十騎ばかり。正次等以為へらく、撃ちて之を取るべしと。景勝に報せず進みて柵に迫る。勝永の子甚三郎忠正も亦之に従ふ。正次の兵酒井左一郎進み柵を破らんと欲す。五郎右衛門槍を擲なげ之を鏖つく。左一郎被創す。正次槍を揮ひ五郎右衛門を搥つき之を倒す。

屋代忠正柵を超え其級を獲る。家忠日記作撃矢野和泉守獲其首誤。今從松栄紀事 勝永・政世

力戦す。敵兵柵を闔ぢ鳥銃を連放す。正次・勝永等前軍後軍に護り退く。正次の功これ焉きよに居多たたり（大部分だ）。景勝の兵前に来柵門を破らんと欲し銃を放ち相争ふ。志

貴野・今福間に小川有り、隔つること一町余。佐竹義宣、志貴野の戦を見今福を急攻す。敵将矢野正倫濠を穿ち柵を樹つ。炬を焼き旦を達し以て工役を董す。仮橋を設け銃卒を二三町ばかり出だす。義宣の前鋒梅津半右衛門憲忠・戸村十太夫義国五六十騎潜かに堤下より進み闘ふ。銃卒を逐ふ。〔(義国カ)之兵十人仮橋を度り之を拒ぐ。半死半傷。憲忠・義忠等力戦す。敵仮橋を撤する能はず。亦柵門を闔づる違あらず。正倫鉛に中りて斃れ、飯田家貞戦死す。部兵の死者過半、其余皆走る。徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記

臣按ずるに、大坂新進の将士多く利を以て合す。驍勇を以て著名と雖へども其実は皆募兵なり。唯だ矢野和泉守正倫のみ出处頗る義に近し。難波戦記に拠れば正倫、中村忠一に事ふ。忠一蚤世(早世)するに及び其妾所生の一子有り。宰臣議協せざる者有り。子無きを以て故忠一の封除を聞く。正倫之を憂へ関東に訴ふ。然れども歲月既に過ぎ事機(お)に後る。竟に申し達するを得ず。故に大阪城に人

り秀頼に披陳して曰はく「事成らば則ち旧封を遺孤に賜ひ以て其家を紹せよ」と。秀頼之を許す。客兵五十騎を授け以て隊將と為す。臣竊かに謂ふ、正倫質を秀頼に委ぬるは則ち不可なり。然れども此の如からずは則ち計出づる所無し。而して中村氏血食する(祖先に供える)を得ず。故に功效を著はし以て遺孤を立てんと欲す。専ら故君の為にして己の為に非ず。其志哀れむべき者有り。今福の戦に奮撃して死す。命なり。志操凜然として終に奪ふべからず。其れ、懷利苟合(迎合)の者と同日にして語るべけんや。

義宣の兵進み街口柵を破る。敵兵使を城中に馳せて曰はく「今來救せずんば則ち備前島將に陥ちんとす。勢殆ど危ふし」と。大野治長、本郷左近・山口弘定等を遣はし之を援く。七隊長伊東長次・速水守久・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野々村吉安・堀田正高(役方)彼を督し天満に在り寨を築く。事急たるを聞き皆出で援に赴く。城中鼎沸す。木村重成今切を守る。之を聞き単騎出で救ふ。大阪の前鋒河

島和泉守・上村金右衛門・山口知徳院業銃卒(業)を列し東軍を拒ぐ。義宣の兵街口柵を捨て第二第三の柵を守る。和泉守等使を重成に遣はし報して曰はく「街口柵既に之を奪ひ還す。今援兵を給はば則ち二三柵も亦奪ふに難からず」と。重成、大井何右衛門・高松内匠を遣はし来援す。銃を放ち之を撃つ。義宣柵を去ること七八間、退き堤曲に至る。相与ともに柵二重を隔つ。辰より午に至り銃を放ち互いに争ふ。重成及び堀田正高相踵して至る。秀頼、後藤年房等と楼櫓に登り今福の戦を望む。重成の勢危ふし。年房に命じ之を救ふ。年房、従士(言)をして帰當せしめ鎧を取り(よろい)を取りに行かせた。之を京橋上に擲まふ。馳せ今福に至り將に重成に代らんとす。駿府記曰、木村長門守・後藤又兵衛將兵三十余騎而出。按ずるに、二人単騎に出で救ふ。衆兵追ひ至り未だ整陣に及ばずして戦ふ。蓋し伝聞の謬。故に取らず。重成聴かずして曰はく「両軍戦酣たけなわ、今に及び相代らば我陣必ず乱れ敵の乗ずる所と為る。子戎事しに老たりろう。此言を發すべからず」と。年房詔屈(語)し重成の後に陣す。直江兼續志貴野より河を隔て銃を

発す。年房、重成と議り船を河辺の街市に取り之を水田に泛べ鉄盾を排し烏銃を列し横から義宣の陣を撃つ。東軍動揺す。徳川記・慶元記・難波戦記・松栄紀事 年房衆に挺ぬきんで指揮す。兼續之を見銃卒をして之を撃たしむ。鉛其鎧に中ること五六。其一是左脇を傷つく。血流涌くが如し。年房之を田に捫なづ。創軽し。右府公の運未だ傾かざるなり。城兵皆、其の大阪を以て一人の任と為すを晒ふなり。冬夏事記 重成の兵柳名右衛門の船堤北に入り亦之を横撃す。重成の部兵松浦弥左衛門重政及び堀田正高の兵浅野清兵衛先登し我兵の首級を獲る。徳川記・慶元記・難波戦記並曰、重政提首入城。使書史白井甚左衛門記於簿。甚左衛門不書。重政怒責之。猶未書。既而清兵衛亦提首来曰、我獲首最先。然後馬我歩。故来遲。甚左衛門謂重政曰、第一級必有相争。見第二級定其先後記之。是典故也。然事急故書首二。記二人名。按ずるに、此れ城中の事にして我軍に与らざる事。故に書かずして此に附す 高松内匠・大塚勘右衛門等八人も亦級を獲る。義宣の兵敗れ第三柵を去り裏柵に引き入る。重成槍を揮ひ刀戟す。平塚左助・大井何右衛門衆を励まし督戟す。重成勝

に乗じ北^にぐるを逐ひ義宣の麾下に迫る。義宣の宰渋江内膳政光 難波戦記渋江作志保井。

国音相通。今從徳川記・難波戦記・松栄紀事 部下兵三百余騎を以て之を迎へ撃つ。駿府記曰、

内膳兵六七百騎。今從松栄紀事 重成の兵柵内に引き入る。政光衆に挺^{ぬき}んぢ之を逐ふ。重

成大呼し還り戦ふ。衆軍来援す。重成部兵井上忠兵衛をして政光を狙撃せしむ。

忠兵衛大銃を放ち洞^(貫)す。政光馬を墮ち死す。難波戦記曰、後藤又兵衛之兵寺本八左衛門獲

其首。冬夏事記作大墨九郎右衛門。松栄紀事曰、敵欲取其首、政光之兵急進担屍而歸。二説不同。未知孰是 部

兵悉く戦死す。残兵幾んど無く陣中に引き入る。義宣の麾下僅かに五六十人。前

軍の敗るるを見怒りて曰はく「我江戸に在り直ちに北陣に赴く。秋田の兵未だ来

ず。故に寡軍にて利を失ふ。是れ大いに憾むべきなり」と。親^{みずか}ら眉尖刀を揮ひ衆

に先んじ奮撃す。其臣梅津憲忠・戸村義国・大塚九郎兵衛資卿 諸書大塚作戸塚。今拠

難波戦記訂之 信大内蔵助久勝・黒沢甚兵衛道家等皆殊死戦ふ。政光・憲忠以下名皆拠難波

戦記 重成の陣^{かた}牢く破るべからず。義宣援を上杉景勝に乞ふ。景勝の部将水原親憲 難

波戦記曰、親憲、時年可八十。事在五年長谷堂之戦。二百余兵を率ゐる来援せんと欲す。河の中
央に進み至る。水深く渉るべからず。親憲部兵をして鳥銃を連放せしめ敵陣を横
撃す。重成・年房・正高の兵今福堤を過ぐる能はず。皆堤下の水除(際)に沿ひて退く。
大井何右衛門鉛に中り斃す。駿府記・徳川記・難波戦記・慶元記・冬夏事記 是に先んじ、大
將軍、榊原康勝をして義宣を援けしむ。前軍三百騎ばかり志貴野河岸に陣す。康
勝はし数使を遣はし戒むるに、軍令を待たずして出戦するを得ざるを以てす。前軍義
宣勢危ふきを見る。令可を待はつ能はず、直ちに河水を涉り重成の陣を横撃す。重
成其の既に疲労するを度はり、収め城に入る。上杉景勝の兵志貴野堤に陣す。直江
兼續に命じ塹を大和川西に穿ち柵を樹たて土堵どを累す。鐵孫左衛門をして大小の鳥
銃四五百口を列せしむ。部兵其意を解せず、皆戦場を掖わにして備を為すは殆んど
不可なりと謂おもふ。部将安田上總軍旅に老練たり。隅田大炊少壮にして未だ更事(経
験)多からず。兼續、上總を以て前軍と為し大炊二軍と為すを請ふ。景勝曰はく「然

らず。城兵再び出で突戦せば則ち前軍必ず敗す。須らく二軍を以て勝を制すべし」と。
乃ち之を易置えきち（配置を替える）す。冬夏事記 城將七隊長及び渡邊尚・木村主計頭重

成叔父。難波戦記作主馬助。今從徳川記・慶元記・冬夏事記・竹田栄應 或作永應、栄翁国音相同。今從

松栄紀事・大野治長の部兵合せ一万二千余抛冬夏事記 出で景勝の前軍と戦ふ。柵二重
を奪還し五（互）に前却（進むこととしりぞくこと）有り。城兵大銃を連放す。隅田大炊銃を放

ち互いに争ふ。島津玄蕃槍を揮ひ力戦す。然れども城兵衆多く大炊退走す、敵兵
勝に乘じ追撃す。二軍安田上總力戦し時を移すも亦敗走す。三軍水原親憲、銃手
五百を列し麾を揮ひ景勝の命を称し、上総の敗兵をして左右に分けて退かしむ。

親憲陣を整へて進み五百の銃を連放す。敵兵授摩（披）す（ふるえ伏す）。鐵孫左衛門大小銃
を発し之を横撃す。其孫虎之助驍勇にして善戦す。浪花戦記曰、虎之助時十三歳 安田上

總衆を励まし還軍す。隅田大炊も亦還り闘ふ。竟に之を大いに敗る。竹田兵庫・
子大助・岡村百百之助・小早川左兵衛以下数百級を斬る。衆皆景勝の善く敵を料

るに服す。難波戦記・冬夏事記○勇士一言集曰、志貴野之戦以安田上總為二軍。隅田大炊為前軍。此景勝之方略也。志貴野要衝之地、大阪七隊長守之故以二軍為要。上總不喜在二軍。開而張陣。以為大炊必敗走。及交戦大炊果敗走。入上總之陣。上總横撃城兵破走之。大阪恥其敗单騎犯陣獲級而還。此謙信村田川之戦、以奥州援兵為前軍、我兵為二郡之故智也。鐵孫左衛門不顧兩軍將戦。穿塹累土堵。州（列）銃而持。七隊長又出突戦。上總戦疲退至麾下。兩軍塵（おう）戦。景勝左右堅陣不動。孫左衛門発銃急撃城兵破之。大炊合隊追撃。終得大捷。抛冬夏事記。孫左衛門横撃亦景勝之所命也。按ずるに、隅田大炊は謙信の老将。五年七月伊達政宗と梁川に戦ふ。上文に見ゆ。志貴野に戦ふは其子なり。大炊を襲称す。城兵穴沢主殿助盛秀能く眉尖刀を揮ふ。其術を以て秀頼に教ふ。出戦し景勝の兵七八人を殺す。直江兼續の部兵折下外記 勇士一言集作阪田五郎左衛門。今從徳川記・難波戦記 槍を以て之を擬ねらふ。盛秀捷すはやきこと奔電の如し。進み外記を撃つ。外記槍を捨て相搏うつ。景勝の兵来救し遂に盛秀を斬り其級を獲る。景勝戦ひ疲れ使を左軍堀尾忠晴に馳せ援を乞ふ。忠晴、堀尾河内・堀尾修理・前田丹後をして歩卒二百人を率ゐ之を援けしむ。城

兵鳥銃を連放し援軍進むを得ず。使を忠晴の陣に遣はし鳥銃に精たる者を乞ふ。忠晴、伊賀・雜賀の兵の銃手に名ある者八十人を遣はす。援軍利有りと雖へども景勝の兵動やもすれば輒ち退走す。直江兼續、兵を盧葦最中に伏せ銃を放ち之を横撃す。城兵前む能はず。東兵還り戦ふ。又柵一重を取り援軍河洲に沿ひ放銃し亦之を横撃す。丹羽長重、景勝の陣後に在り。進み前軍と相並び銃矢を放つ。敵支ふる能はず城中に引き入る。徳川記・慶元記・大阪軍記・難波戦記○冬夏事記曰、神祖聞志貴野之戦遣久世三四郎。大將軍遣佐久間將監戒以輕収兵勿損士卒。使堀尾山城守率兵代景勝。山城守進向敵陣。頻放鳥銃欲代景勝。景勝前軍諸將不聽。益進兵。神祖・大將軍數馳使、使退兵。景勝怒曰、武夫爭先。有競分寸。自旦至午悉力所取。戦易使他人得之。雖公命不能也。丹羽長重欲議軍事至景勝麾下。景勝不擲甲座胡床瞠目望城。三百余兵提槍護景勝。景勝終不顧長重。長重不得進。景勝進与前軍相並云云。与諸書異。附以備考。松栄紀事曰、後藤又兵衛至志貴野開柵門悉馳突。其鋒甚銳。景勝之兵退走数町。又兵衛逐之。東軍候其離城既遠。作勢還戦。又兵衛不能復戦。退入柵内。景勝戦疲乞援堀尾忠晴。忠晴分兵為二。其一沿河洲、放銃横撃。其

一進自堤上。景勝使水原常陸率歩卒之舟南方河水連放銃。城兵三方受兵不能進。又兵衛又出馳突。勵衆景勝・忠晴競進督戰。又兵衛中鉛披創。部兵多死。景勝後軍丹羽長重亦進兵督戰。城兵不能支。引入柵内。按ずるに、年房披創し、水原親憲河に泛び銃を故（放）ち横撃す。皆今福の戦にて志貴野に非ず。上文に詳し。今上の諸書に従ふ 榊原康勝、其前軍の違令を怒り進み闘ふ。先登の士二十余人を殺し以て軍法を正さんと欲す。佐竹義宣、使を遣はし謝して曰はく、「今日の戦我軍幾んど危ふし。足下の援兵を頼み以て退軍を得」と。故に康勝^{ゆる}積して問はず。難波戦記 志貴野・今福の監使帰り其状を報す。神祖書を賜ひ康勝・義宣の将士を褒む。徳川記・難波戦記。按ずるに、鷲峯文集、梅津系譜巻首に題し又云ふ「憲忠、義宣に難波に従ひに勇名を揚ぐ。且賜ふ所の台翰を写し書籠（しよろく）に蔵す」と 本多忠朝をして佐竹義宣に代はり今福を守らしむ。松栄紀事曰、両軍酣（かん）戦終日。景勝憤奪還其所取柵。義宣憾渋江内膳戦死。欲夜放之。敵兵固守柵門。其夜引入城中。志貴野地形敵有利於出兵。故使本多忠朝築寨備之。与比異。今従于三書 浅野長重・松平出雲守勝隆・眞田信吉・其弟信政・仙石忠政・秋田実季・新莊直定等之

に属す。徳川記・慶元記・難波戦記 水野勝成・永井直勝、新家村道路を按行す。堀直奇も亦之に従ひ来。棚楼を構へ博勞（淵脱）を圧す。神祖、勝成・直勝をして葦島を闢ひらき中島に通ぜしむ。新家村の道路往来するに便を得たり。然れども島嶼離散し、舟に非ずは行くを得ず。神祖兵を蘆島に屯せんと欲して将を選ぶ。兵多きは地隘せまく容るる能はず。兵寡きは守り難し。故に選に応ずる者莫し。徳川記・慶元記並曰、穢多

村左右有蘆葦叢。城兵伏其中放銃矢。二十六日神祖命石川忠總艾之。二十七日千賀孫兵衛言曰、穢多村側近造浮梁六所。蜂須賀・九鬼・戸川之兵往来得自由。二十八日日本多正純・成瀬正成・安藤直次、見福島新家村之形勢、言于神祖曰、此要害之地也。然多衆難容。寡兵必敗。不可不備。皆一事也。難波戦記・松栄紀事不係曰、与忠總事連書。今從之 石川忠總、其本生父大久保忠鄰罪を得るを以て、近侍するを得ず。行營に従ひ在り。恒に功を立て罪を贖はんと欲す。永井直勝に就き葦嶋を守るを請ふ。神祖之を許す。難波戦記・松栄紀事 監使日夜諸陣營を按視す。神祖其苦寒を勞ねがひひ監使十五人を増し置く。難波戦記

二十七日、石川忠總兵を率ゐ葦島に至る。神祖監使を遣はし之を監る。難波戦記・松
榮紀事 九鬼守隆・向井忠勝・千賀与八郎・小濱民部に命じ戦艦を近くす。大野治長
大艦有り。名、盲船と曰ふ。徳川記・慶元記曰、船無首尾、舳艫設艫進退自由。故名之。難波戦記

曰、船屋塹壁甚厚。夫（矢）石不能入。松榮紀事曰、屋上構棚楼 其余の大艦数十隻舳^へと舳相衝す。

我舟師競進するを見、戍兵其敵する能はざるを度り舟を捨て逃散す。守隆・忠勝

等盲船以下の船艦を奪ひ火を新家村に縦つ。戍兵悉く走る。松平利隆、弟忠継と

新家村に入り陣す。徳川記・慶元記・松榮紀事

二十八日、神祖将に野田・福島を按行す。予め銃手三百人を遣はし城に向ひ之を
放つ。故に城兵敢へて出でず。島津家久、其臣伊集院半右衛門を行営に遣はして
曰はく「陸奥守舟師を率ゐ薩摩を出づ。軍期に会するは将に近きに在り」と。創業

期・徳川記・慶元記・難波戦記

二十九日、勅使廣橋大納言藤原兼勝・三條大納言藤原實條、住吉の行営に来、勅

を宣し慰勞す。年譜・創業記・家忠日記・松榮紀事 神祖出迎へ拜謝す。

是日、諸軍に糧食を増し給ふ。凡そ三十万人に毎日米一千五百斛、(右)遠国は之を倍

にす。徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記・大阪軍記 博勞淵最も敵の要害と為る。前に大

川二道有り。西は葦島に連なり、南北は壕塹・架橋有り。棚楼を構ふ。城將薄田

兼相、兵六七百を率ゐる鳥銃を列ね之を守る。兼相驍健を以て著名たり。故に其選

に当る。石川忠總之を攻めんと欲し、黎明、兵を將ゐる葦島洲上に出づ。潮満ち水

深くして渡るを得ず。たまたま 偶小舟一隻有り。流れに順ひて下る。部兵阪部与五左衛門・

神田九兵衛等八人。松榮紀事作七人。或云九人。今従徳川記・難波戦記 喜び其舟に乗り槍を以

て棹と為して渡る。前夜兼相出で青楼に飲す。部下も亦然り。戍兵甚だ寡し。忠

總の兵猝にわかに至ると意はず拒闘する能はず。走にげ大阪城中に入る。八人棚楼に登

り背旗を以て我軍を招く。兼相、兵四五百騎を率ゐる東方より来。八人之を見、其

の必死を決し棚楼を下り固く東門を守る。忠總之を救はんと欲するも亦渡るを得

ず。焼損する小舟有り。流れに沿ひて来。忠總之に乗りて渡らんと欲す。叔祖大久保権右衛門忠為七郎右衛門忠世弟相模守忠鄰叔父先に渡るを請ひ亦槍を杖にして渡る。兼相之を見、以為へらく、多衆既に城を抜くと。遂に兵を引き還る。九鬼守隆、舟一隻を送る。忠總喜び之に乗りて渡る。亦衆軍を渡す。松榮紀事曰、忠總將攻博勞淵。

敵兵登棚樓、連放鳥銃。我兵多披創。忠總描金胡蝶之背旗中鉛亡。叔祖忠為戒衆使不得進。衆不聽。覓得燒

損小舟杖槍渡。偶有小舟数是（隻）順流而下、余衆乘之得渡。今從徳川記・慶元記・難波戦記使を蜂須

賀至鎮の營に遣はし孤軍を以て博勞淵を取るを報ず。至鎮、以為へらく、城兵出

で争はば則ち戦必ず危ふしと。鳥銃三百口を遣はし之を援く。城兵平子主膳素勇もと

名有り。其子茂兵衛と博勞淵を守る。城既に陥ち復び戦ふ能はず。船に乗り將に

大阪城に走げ入らんとす。松平忠雄の兵横川次大夫追撃し主膳の首を獲る。箕浦

玄蕃諸書作右近。今從城所友仙訂正。冬夏事記曰、次大夫舟師也。勇而矯健、主膳数失礼於神祖。神祖常

悪之。次大夫獲首献之。神祖悦而賞之茂兵衛を斬り其首を獲る。残兵、阿波座に走げ入る。

忠總追撃し多く級を獲る。難波戦記、以忠總取博勞淵、為二十八日早旦事。今從創業記考異・家忠

日記・慶元記・冬夏事記・松榮紀事 城將大野道見、小倉行春及び船監梶原丹後をして大野治長の兵と戦艦を列し港口を扼^{おさ}へしむ。

是夜、石川忠總・九鬼守隆・向井忠勝等兵を潜め堤下より進む。敵兵驚騒す。我兵三口を禽^とへ七級を獲り戦艦数艘を奪ふ。忠總の兵大久保八郎五郎・阪部与五左衛門等十三人舟場街に入る。敵皆引き去る。僕圍^{かき}数輩を斬る。其首を取らず、敵の遺す所の旗幟を齊^{そろ}へ營に帰る。忠總喜び使を至鎮の營に遣はし舟場街を取るを告ぐ。何^いこに向きて陣するかを問ふ。至鎮、忠總の我より先んずるを憤る。馬に策^{むち}して進み、報せて曰く、「須らく行營の指揮を受くべし」と。水陸並び進む。中村右近・山田織部・樋口内蔵助由陸・森甚五兵衛・森甚太夫・森藤兵衛、舟路より死傷を顧みず力戦す。敵を破り二級を獲る。至鎮之を行營に献じ舟場街を破り先登するを称む。忠總奪ふ所の旗幟を献ず。神祖之を褒めて曰はく、「真に七郎右衛

門の孫なり」と。創業記者異・家忠日記・徳川記・慶元記・難波戦記・冬夏事記○難波戦記曰、忠總

取舟場街、在至鎮之先。然使者往復頗移晷（き）刻（時刻）。故至鎮功第一、忠總為第二。忠總謂部下曰、獻

朝間所斬僕圍之首於行營、則吾功必居第一。恨為至鎮所敗、悔之無及。附以備考 城將、胥議りて曰あつまりはか

はく「博勞淵既に石川主殿頭の陥す所と為る。浅野但馬守・蜂須賀阿波守・松平

宮内少輔等の戦艦海上に填咽すてんいん（充ちあふれる）。仙波の地幾んど危ふし。之を奈何為んいかんせ」

と。七隊長皆曰はく「凡そ城守の法は、城郭広大、損有り益無し。故に吾曹之を

切諫す。然れども大野主馬聴かず。塞を今福・博勞淵に構へて敵の陥す所と為る。

其氣を増すに従ひ、自ら街市を焼き以て其守を約すに如かず」と。徳川記・慶元記・難

波戦記並曰、焼天満・舟場街市。按ずるに、上文、中七日、城兵自ら天満宮を焼き今城中に引き入る。蓋し

前に陣營を焼き今街市を焼くなり。舟場既に石川忠總の拠る所と為る。今従年譜・駿府記・慶元記・松栄紀

事。又按ずるに、徳川記・慶元記・松栄紀事二十九日に係く。今駿府記・難波戦記に従ふ。○松栄紀事曰、

後藤又兵衛・森豊前守馳馬出救仙波之浜。暗夜迷塗縦火数万人家。敵兵多焚死者。按ずるに、城將胥議し自

ら街市を焼く。此に至るべからず。疑ふらくは記載の繆。冬夏事記係十二月二日、曰、後藤又兵衛按行京橋至天満橋皆焼之。大野主馬・塙團右衛門欲襲我陣營。故留本町一橋不焼。又兵衛見之曰、何不焼之。主馬問之曰、此我所守。子、勿容喙（ようかい）。又兵衛怒幾欲鬪。團右衛門和解之。此又一説也。附以備考 大野治房之を拒みて曰はく、「吾固もとより道頓堀を守る。未だ嘗て敵と交鋒せずして、嘗てを焼き城に入るは吾能はざるなり。諸君宜しく兵を引き城に入るべし。吾此地に死なん。須らく之を棄殺すべし」と。治房の兵幾んど一万。城將之を棄つる能はず。乃ち相課り晦夜軍事を議るに託し急ぎ治房を召す。来せしむること再三。夜半、治房城に入る。其出づるを伺ひ、謀をして火を仙波・天満街市に縦たしむ。烈風に火勢甚だ猛く治房の部兵皆器械乗具を棄て城に入り止宿する所無し。狼狽を失ふ。唯だ塙直次のみ一人徐おもむろに器械を収め城に入る。蜂須賀至鎮の部兵争ひ敵地に入り、棄つる所の旌旗・器械を取る。翌日、旗幟を陣營に建て以て之を嘲笑す。治房の部兵皆憤恚ふんいす。冬夏事記○難波戦記曰、七隊長谷（咎）大野主馬之失計、使焼天満・

舟場之街市。主馬曰、焼街市而有利城守則吾不敗（敢）拒。晦夜自焼街市引兵入城。抛冬夏事記、十二月十

六日夜、塙直次襲蜂須賀至鎮之營。其源起于此。叙事詳。故今從之是に由り蜂須賀至鎮・松平忠

義・松平忠雄・浅野長晟・鍋島勝茂・石川忠總・九鬼守隆、陣を舟場に移す。松栄

紀事曰、至鎮陣于阿波座。長晟歸今宮而陣。今從徳川記・慶元記・難波戦記 藤堂高虎に命じ大銃を

以て織田雲生寺守る所の西南の楼櫓を撃つ。徳川記・慶元記 松平忠繼、兵を將ゐ今橋

に向ふ。城兵頻りに鳥銃を發す。大將軍之を聞き鉄盾を忠繼に賜ふ。家忠日記 歩卒

六人盾三張を橋頭に排し之に翳^{かく}れ放銃す。城將大野治房の兵大銃を以て之を撃つ。

盾皆倒れ歩卒盾を捨て逃げ歸る。城兵哄笑す。忠繼怒り盾を収めしむ。部兵河田

八助直ちに前み^{すす}鉄盾三張を脇にして歸る。城兵放銃し之に中つ。傷死なずと雖も

人皆其勇力を称む。大阪記作河田太郎左衛門。今從難波戦記・松栄紀事 神祖諸將を詰^なりて曰

はく「舟場の兵登時皆布陣す。而るに天満の兵今に至り未だ川を涉らざるは何ぞ

や」と。松平利隆以下謝して曰はく「城和泉守固く之を止む。故に濡滞す」と。

神祖怒りて曰はく「さき 曩に和泉守を天満に遣はす。少年輩号令を待たず輕冒して進み反りて我兵を損するを、慮らしむるなり。今其命を固守し座して時機を失するは陋ろたること甚だし」と。乃ち林道春を召し、城昌茂を責めしめて曰はく「汝、知らずや、將、軍に在り君命受けざる所有るを」と。遂に之を逐ふ。徳川記・慶元記・

難波戦記・冬夏事記・松栄紀事 又伊奈忠政を召し其の遲緩を責めて曰はく「曩に春日井堤を築くを命ず。今に至り成らず。何ぞ其れ怠たるや」と。徳川記・慶元記・難波戦記・

冬夏事記。按ずるに、春日井堤即ち上文十二月二十九日書く所。狭田宮堤是なり。